やまがたアートサポートセンター ら・ら・ら
活動報告書 2021

きざしをみつけるまなざし

GALLERY LA♪LA♪LA

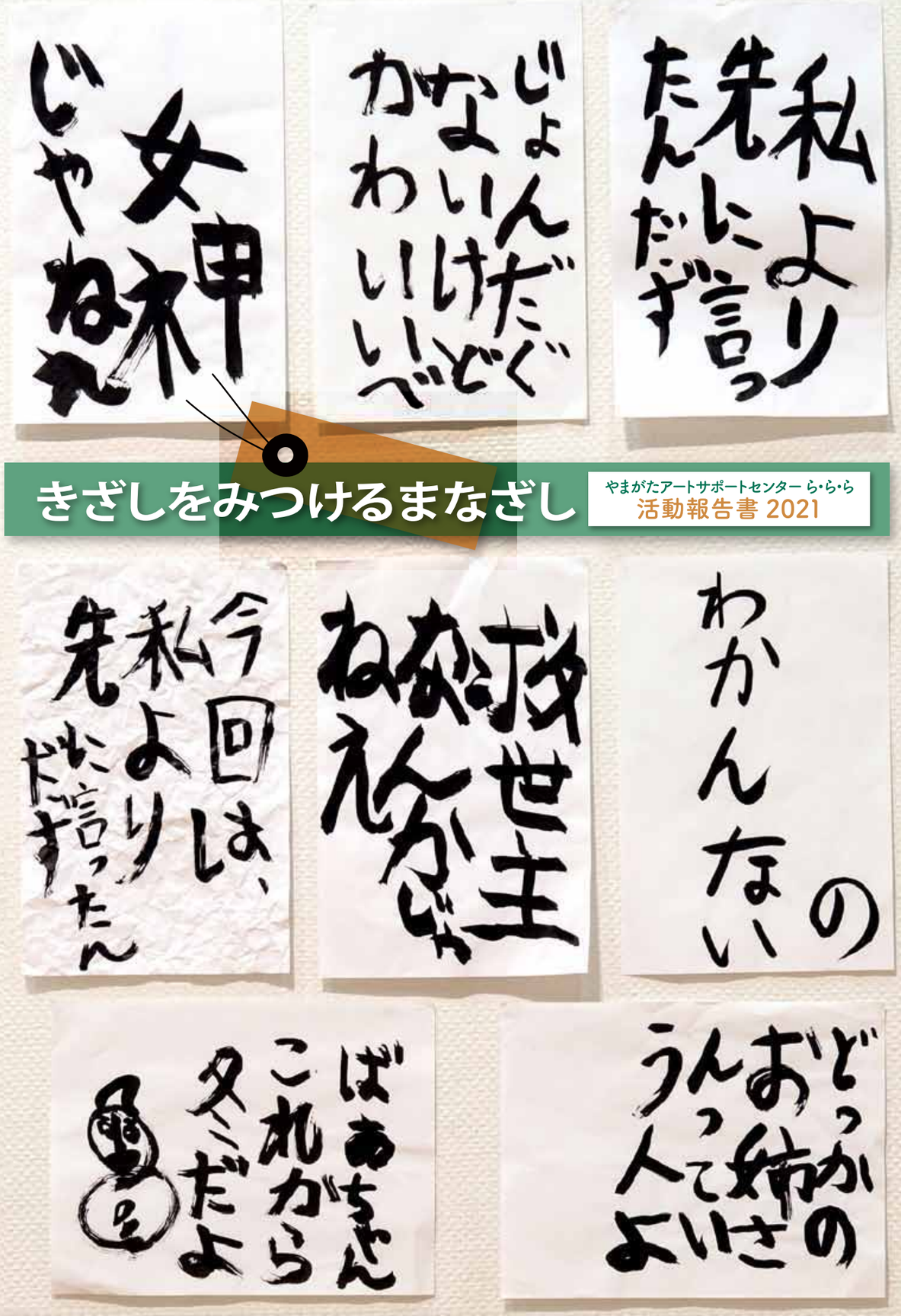
企画・制作・発行／
やまがたアートサポートセンターら・ら・ら
〒990-0033 山形県山形市諏訪町一丁目２番７号
TEL : 023-674-8628　FAX : 023-664-2118
MAIL：g.lalala@y-aisenkai.or.jp
WEB：https://www.y-aisenkai.com/gallery/
Facebook：https://www.facebook.com/gallerylalala

編　集／井上 瑶子(giinika)
木村 隆司・武田 和恵
（やまがたアートサポートセンター ら・ら・ら）

デザイン／りうぢ堂

表紙作品／荒木 咲

助　成／令和3年度
山形県障がい者芸術文化活動普及支援事業



令和3年度山形県障がい者芸術文化活動普及支援事業

やまがたアートサポートセンター ら・ら・ら

活動報告書 2021

きざしをみつけるまなざし

令和３年度山形県障がい者芸術文化活動普及支援事業

CONTENTS
目　次

ごあいさつ …… 1
やまがたアートサポートセンター「ら・ら・ら」とは？ …… 2
やまがたアートサポートセンターら・ら・ら 2021年度の事業概要 …… 3

やまがたでつながるボーダレスアート2021 きざしとまなざし …… 4
やまがた障がい者芸術作品公募展／山形・福島・新潟交流事業／
企画展「やまがたのきざしとまなざし2021」概要 …… 4
山形・福島・新潟 障がい者芸術交流展 …… 5
やまがた障がい者芸術作品公募展　受賞作品
・大賞 …… 6
・山形県知事賞／岡部 信幸賞 …… 7
・瀬尾 夏美賞／halken LLP賞 …… 8
・吉田 勝信賞／オーディエンス賞 …… 9
・入選作品 …… 10
［関連イベント］おめでとう & 相談day …… 13
審査員総括 …… 14
［関連イベント・ワークショップ］きざしとまなざし …… 16
［企画展］やまがたのきざしとまなざし2021
・佐藤 理恵子さん × 佐藤 貴恵子さん …… 17
・長濱 哲哉さん × 長濱 志穂さん …… 18
・大泉 真帆さん × 長谷部 康寛さん …… 19

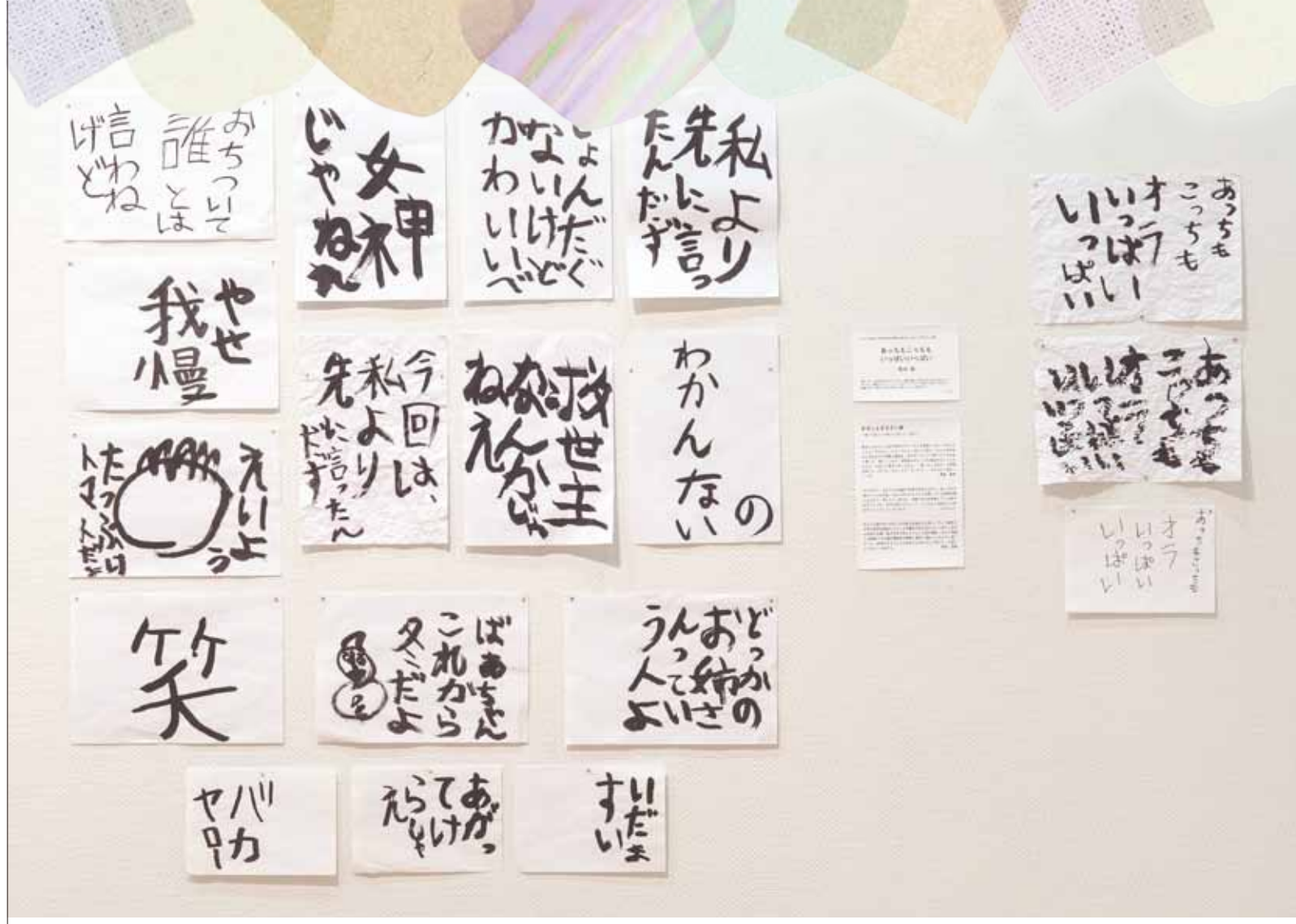
地域へ出かけ一緒にやってみる［アウトリーチ事業］ …… 20
［ダンス］「からだをまなざす・ダンスワークショップやまがた2021」 …… 20
・鶴岡　開催概要 …… 21
・山形　開催概要 …… 22
・米沢　開催概要 …… 23
［展覧会］
・酒田　サカタアートマルシェ2021「いいいろいろいろ」 …… 24
・鶴岡　「さあ 咲き誇れ！ひょうげんの花2021」 …… 25
・米沢　「第3回 わたしとあなたの表現－障がいのある人と関わる人の作品展」 …… 26
［研修会］
・米沢　「一緒に見つけて考える一人ひとりの可能性
－それぞれの表現と創造力を開花させる支援方法－」 …… 27
［アトリエ紹介］
・最上新庄　「あとりえ・くれよん」 …… 27

［調査報告］
・令和3年度　山形県における障がい者芸術文化活動状況のアンケート調査 …… 28

分野を超えてさらに先へ［協働事業］ …… 30

福祉と芸術文化のかけ橋［ぎゃらりーら・ら・ら］ …… 31
ぎゃらりーら・ら・ら／オープンアトリエ「アトリエ ら・ら・ら」 …… 31
2021年度　ぎゃらりーら・ら・ら企画展
［企画展］わくわく・ひょうげんの泉 …… 32
［企画展］「みえるものの向こう側」大泉真帆 長谷部康寛 二人展 …… 32
［公募展］「第５回やまがた障がい児者アート公募展 ART DIGる～べ」 …… 33
［外部会場での展覧会］「きざしとまなざし特別展 遊学館」 …… 33
［企画展］「宮城山形交流事業 みやぎ・やまがたニューカマー展」 …… 33
［企画展］長濱哲哉個展「じゃじゃーん！！！！ てっちんの世界」 …… 34

御礼とあとがき …… 36



当法人では山形県より障がい者芸術文化活動普及支援事業を受け２年となりますが

今年度もこのような形で活動報告ができることをうれしく思います。

ご本人の意思決定支援が理念となる中でご自身を表現する手段として

アートは最も有効な方法であると思います。

ご利用者の中にはなかなか言葉では想いを伝えることがむずかしい方が大勢いらっしゃいますが、

作品を見ていると一人ひとりの心の鼓動が聞こえてきます。

これからも障がいのある利用者と地域社会の懸け橋となる活動を続けてまいりますので

気軽に足を運んでください。お待ちしております。

皆様には尚一層のご支援を宜しくお願い申し上げます。

社会福祉法人 愛泉会 理事長　井上　博

やまがたアートサポートセンター「ら・ら・ら」とは？

2016年から山形県の事業として「やまがた障がい者芸術活動推進センター」を立ち上げ、山形県内の障がいのある方の芸術活動の普及支援に取り組んできました。2020年からは、障がい者芸術文化活動普及支援事業「やまがたアートサポートセンター ら・ら・ら」(以下ら・ら・ら)として、障がいのある方の芸術文化活動のさらなる充実のため、下の５つの事業に取り組んでいます。
山形県内各地域の活動に寄り添い、様ざまな人材と連携しながら、山形県全体での芸術活動の促進と普及を目指します。この活動によって、多様性への理解を深め、新たな価値づくりを支援し、互いを尊重し理解しあえる地域の包容力を高めるべく取り組んでいきます。

つくる、つなぐ、つたえる

まあるく、つないでいます

❶ 相談支援
表現への思いをつなぐ

表現活動を始めたい、作品を発表したいなど、山形県内の障がいのある方の芸術文化活動に関しての相談支援を行います。寄せられた相談内容に応じて、訪問調査や他の機関や専門家への橋渡しなども行っています。

❷ 人材育成
「気づき」の場をつくる

トークイベント、研修会、ワークショップ等、実践を交えて学んでいく人材育成プログラムを企画・運営しています。福祉の分野だけではなく、芸術文化等の分野とも連携して、関係する人口が増えるよう、実践を行います。

❸ 関係者のネットワークづくり
人と人、活動と活動をつなぐ

芸術文化活動を実践している障がいのある個人、団体、芸術文化団体、専門家、行政機関等と連携し、各地域内または地域を越えたネットワークづくりを行っています。情報交換や意見交換を行う様ざまな機会をつくっています。

❹ 発表等の機会の創出
表現と交流の場をつくる

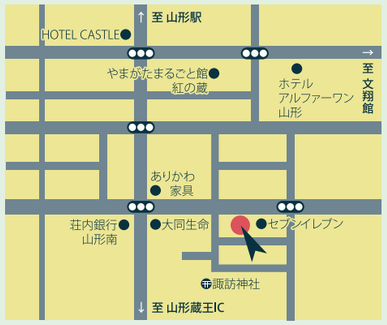
ぎゃらりー ら・ら・らや県内各地域での展覧会や公募展を企画・運営し、表現を発表する機会をつくっています。同時に、表現の発表機会のあり方や展覧会の固有の価値を問い、高めていきます。

❺ 情報収集・発信
活動をみつけ、つたえる

芸術文化活動を実践している障がいのある個人、団体について、訪問調査を実施し、実態把握を行うとともに、作品の発掘や作者情報の収集、記録を行い、ウェブサイト、展覧会等による発信を行います。

社会福祉法人愛泉会「ぎゃらりー ら・ら・ら」とは？

社会福祉法人愛泉会では、2011年に障がいのある方の作品を展示する場「ぎゃらりー ら・ら・ら」を開設しました。障がいのある方の芸術活動の発信と人材交流の場として、福祉と芸術文化のかけ橋になるよう、地域に開かれたギャラリーを目指していきます。
企画展示や、トークイベント、ワークショップの開催、月に１回の創作活動の場としてオープンアトリエを実施しています。(➡P31 参照)



ぎゃらりー ら・ら・ら／
やまがたアートサポートセンター ら・ら・ら
所在地／〒990-0033　山形県山形市諏訪町一丁目2番7号
TEL／023-674-8628　開館時間／10:00～17:00

やまがたアートサポートセンター ら・ら・ら　2021年度の事業概要

2021年度は、県内各地域の活動に寄り添い、表現活動機会の活性化および多様化を目標に事業を継続実施しました。課題としては、障がいのある方がたが表現活動を行うことができる場や専門的な人材の不足、文化的な生活を送るための選択肢が少ないことなどが挙げられます。また、県内各地で絵画や立体作品の展覧会は増えましたが、発表機会が展覧会に偏る傾向もあります。そこで、県内での実態調査、デザインと工業との連携による作品の二次使用、身体表現の取組みなどを始め、異分野との連携や先進事例を持つ講師との協働により、地域の人材育成の仕組みづくりにも重点的に取り組みました。

人材
実践のなかで学ぶ人材育成プログラム

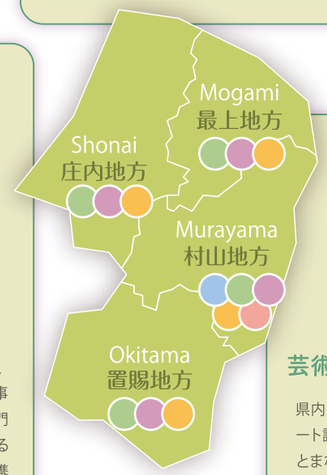
県内３地域(酒田市、鶴岡市、米沢市)で展覧会支援事業を実施し、研修会も企画協力しました。新たな取り組みとしては、身体表現のワークショップを県内３地域(鶴岡市、山形市、米沢市)で実施。県外のファシリテータはオンラインで参加し、各地域の現地ファシリテータが福祉事業所や支援学校に参加して連携することで、実践を伴う人材育成につなげました。

相談
障がいのある方の芸術文化活動に関する相談への支援

電話、メール、ギャラリーや展示会場で対面での相談を受け付け、専門家と連携し、関係機関の紹介やアドバイス、情報提供等を行いました。
・相談件数 223 件
属性：【障がい当事者 70件、家族６件、障がい福祉関係者 74 件、芸術家・文化団体・文化関係者８件、教育関係者７件、医療機関１件、自治体 41 件、その他(企業、報道機関等)16 件】
内容：【創造(創作環境、支援方法等) 104 件、発表(発表したい、開催したい、依頼された)49 件、交流・連携(ネットワークづくりなど)21 件、権利保護(出展依頼、二次利用・商品化、寄贈等)７件、人材育成(研修等の情報、講師についてなど)13件、情報発信(取材、広報、見学)26 件、その他３件】

ネットワーク
分野を超えた多様なネットワークづくり

工業、福祉、デザイン連携事業での実践において、分野を超えた情報交換やネットワークづくりに協力しました。また、県内3地域の展覧会支援事業の実践を通して、障がいのある人やその家族、福祉や芸術分野の専門家、行政職員等とのネットワークを構築しました。身体表現の県内 3 地域での取り組みにおいては、実践者とのネットワーク会議を開催し、各地域での出来事を振り返って共有するなど、次年度に向けた対話を行いました。



発表
表現への理解を深め、価値を高める展覧会

支援センター併設のギャラリーでの企画展(５回)、県内の作品公募展、県内３地域での展覧会支援事業と巡回展を実施しました。また、各地域の専門家と連携しながら作品発表の機会や障がいのある人の活躍の場をつくったり、工業やデザインと連携することで作品の二次使用による商品開発を行い、展覧会以外の発表の機会をつくるなどしました。身体表現のワークショップでは、記録映像を県内3カ所の展覧会場で上映し、発表の機会を設けました。

情報・発信
芸術文化活動のいまを記録し発信する

県内にて障がいのある方の文化芸術活動に関するアンケート調査を実施しました。また、企画展「やまがたのきざしとまなざし」において、県内３組の表現者と支援者の関係性を訪問調査し、作品と写真とテキストを展覧会で展示して各地を巡回しました。
・報道掲載：新聞 10 件、ラジオ２件、テレビ２件、市報 2 件
・年間閲覧数：ウェブサイト3,400回、フェイスブック 3,957 回、YouTube(鶴岡展示関連) 233 回／(悠創館展示関連・限定公開) 53 回

やまがたでつながるボーダレスアート2021

きざしとまなざし

発表　情報・発信

やまがた障がい者芸術作品公募展／山形・福島・新潟交流事業／企画展「やまがたのきざしとまなざし 2021」

■ 開催概要

会　期：2021年11月5日(金)－17日(水)［入場無料］
会　場：悠創館 展示室1、2
主　催：やまがたアートサポートセンター ら・ら・ら
共　催：山形県

障がいのある人たちの表現は、その「きざし」と、近くで表現に寄り添う方がたの「まなざし」、それら相互の関係性によってかたちづくられているともいえます。本企画は、鑑賞する方がたに、表現の「きざし」と、それに寄り添う「まなざし」を体験いただけるよう、作品と言葉を展示した展覧会です。「やまがた障がい者芸術作品公募展」(➡P6-16) のほか「山形・福島・新潟交流事業」として作品5点の招待展示 (➡P5)、さらに企画展「やまがたのきざしとまなざし 2021」(➡P17-19) として作家と寄り添う人の関係性に焦点をあてた展示を行いました。公募展の作品募集にあたっては、多様な表現の応募を後押しするため、事前研修会も実施しました。

やまがた障がい者芸術作品公募展

■ 募集概要

応募資格：山形県出身または在住の障がいのある方
応募総数：199点 (応募者全員 189 点を展示)
審査方法：現物審査　テーマ「きざしとまなざし」
賞：きざしとまなざし大賞1点、山形県知事賞1点、
　　審査員賞4点、入選 20 点、オーディエンス賞1点

■ 公募展のための事前研修会「アートが福祉を参照するために」

公募展に先駆けてオンライン開催した研修会では、講師のアイハラ ケンジさんより、現代アート作品や公募展作品には共通して、「表現の多様性」があるとともに、「丁寧に、注意深く、よく見る『まなざし』の『きざし』がある」などの講話がありました。その後は、昨年の入賞作品についてゲストの岡部信幸さんも交え振り返りました。質疑応答のなかでは、感性を伸ばす関わり方についての話題となり、感性はもともと人に備わっており、それを見つけられる環境をつくることが大切との話がありました。さらに、作者へのアドバイスやアプローチの方法については、「表現をよく見ることがヒントになる」とのコメントもあり、表現活動を支える視点を共有する時間となりました。

開　催：2021年8月12日(木)
講　師：アイハラ ケンジさん (アートディレクター／東北芸術工科大学准教授)
ゲスト：岡部 信幸さん (山形美術館副館長 兼 学芸課長)
参加者：18名 (福祉事業所職員、アーティスト、大学生等)

■ 審 査 員

瀬尾 夏美
アーティスト

土地の人びとのことばと風景の記録を考えながら、絵や文章をつくっている。岩手県陸前高田市を拠点とした制作を経て、2015 年、仙台市で一般社団法人 NOOK を立ち上げる。

halken LLP
クリエイティブデュオ

フォトグラファー／キュレーターの三浦 晴子と、アートディレクター／デザイナーのアイハラ ケンジの2名からなるユニット。東北・山形を拠点にアートブックの制作と出版、展覧会のキュレーションを行っている。

岡部 信幸
山形美術館副館長 兼 学芸課長

山形美術館副館長兼学芸課長。1993 年より山形美術館勤務。山形ゆかりの作家、モダニズム絵画や写真の展覧会を企画。東北芸術工科大学、山形大学非常勤講師。

吉田 勝信
グラフィックデザイナー

東北芸術工科大学美術史・文化財保存修復学科在学中より市場ではじかれる野菜を流通させる八百屋を企画運営。その延長で飲食店を開店し、中退。現在は山形県を拠点にデザイン業を営む。

ら・ら・らレポート

きざしとまなざしをテーマとした公募展と企画展、他県との交流事業を始めて約4年がたちました。山形県内の表現活動の掘り起こしや人材育成を目的に、表現活動に関わる人たちのプラットフォームのような展覧会を目指してきました。年々活動が定着してきて、個人の表現が際立つ作品や、丁寧な寄り添いの姿勢がたくさん見られるようになりました。今回の公募展での「きざしとまなざし大賞」の審査では、技術ではなく表現活動に関わる人と人との関係性を大切にした環境づくりを大きく評価しましたが、そうした展覧会のあり方を感じていただければとの思いを込めました。展覧会場では作品と共に「まなざしコメント」をじっくり読んでくださる方が多く、来場者のまなざしが行き交う温かい場になりました。

本展示には、延べ1,003人の方にご来場いただきました。ご応募いただきました作家・関係者のみなさま、ご来場、ご協力いただきましたみなさまには、あらためて御礼申し上げます。また、本展示の公募展入賞作品および企画展「やまがたのきざしをみつけるまなざし2021」は、その後、鶴岡アートフォーラム、米沢市民ギャラリーナセBAへと巡回。一部展示は「やまがた文化の回廊フェスティバル 2022」に特別展として参加するなど、県内各地へと発表の機会を拡げています。

来場者の声

- それぞれのまなざしコメントがいいと思います。
- 豊かなステキな作品ばかりで、とても感動しました。
- 自分に足りないことを気づかせてくれました。
- 他のイベントとのコラボを街中でも行ってほしい。

山形・福島・新潟 障がい者芸術交流展

県知事連盟をきっかけに、2018年から、山形、福島、新潟の隣県と連携し、県内外での作品発表と交流を深める機会づくりとして開催しています。

福　島：竹本 翔太、近内辰徳
新　潟：新井 里沙、長谷川 あ久里、森 恵理奈
協　力：はじまりの美術館、
　　新潟県アール・ブリュット・サポート・センターNASC

福島県、新潟県の展覧会でも、山形県の作家の作品を展示しています。

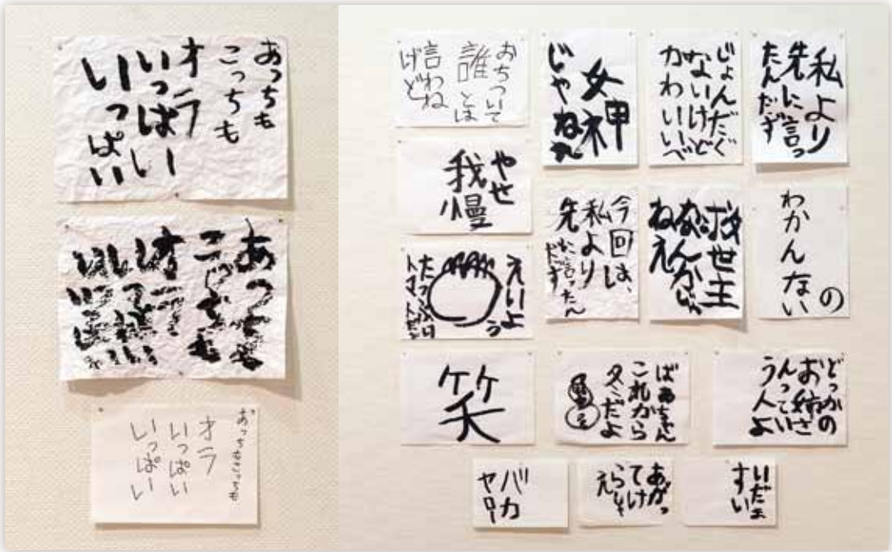
福 島

きになるひょうげん 2021
山形招待作家：椿 ジュン、山田 幸恵

新 潟

第19回 新潟県障害者芸術文化祭
山形招待作家：平 祐哉

やまがた障がい者芸術作品公募展



❶ ❷ ❸

きざしと まなざし 大賞

「あっちもこっちもいっぱいいっぱい／らっふる名言集」荒木 咲

まなざしコメント

❶「あっちもこっちもいっぱいいっぱい」
字のバランスがむずかしかったです。何回か書いてその中からえらびました。イライラして紙をクシャクシャにしておこっているような感じを出してみました。横書きやたて書きで自分の気持ちを筆にぶつけて書きました。

「らっふる名言集」
❷ おちついて
誰とは言わねげど

他の利用者さんと支援員さんといっしょに考えた言葉です。ペンで何回か書きました。ペンに気持ちを込めて書きました。字の大きさや書き方を変えて何回か書きました。どれにしようか迷ってみんなから選んでもらったものです。

❸ 今回は、
私より先に言ったんだず

私より先に帰りの車で私じゃなくて先に他の利用者さんに注意してた時に出来たらっふる名言集です。筆にこめて書きました。横書きにするかたてにするか迷っていろんなバージョンで字の大きさも変えて書きました。紙を描いた後クシャクシャにしました。　／荒木 咲

審査員のまなざしコメント

荒木さんがらっふるの日常でキャッチする言葉たちは、どれもどこかユーモラスだ。スタッフからこぼれた小言や、みんなの生活から生まれた不思議な造語を、荒木さんはこんな風にすてきな形に現して、残してくれる。利用者もスタッフも関係するいろんなひとも、お互いに見守りあいながら、一緒にらっふるという居場所をつくっている。そのことが、まっすぐに、やわらかく伝わってくる。　／瀬尾 夏美

日々の中で、それぞれの葛藤や事情を抱えながら、あっちの立場とこっちの立場、それぞれのまなざしが交差している空間を感じさせます。慌ただしい様子と、冷静に状況を俯瞰している様子のギャップが、文字の暖かさによって、コミカルに表現されて思わずにっこりしてしまいます。
／ halken LLP

何よりも書かれたおかしみのある言葉が心を捉え、そして書体と文字の空間の絶妙なバランスや構成が目を釘付けにします。自分の気持ちを墨一色の文字で伝えようという試行錯誤、さらに仲間との関係やその場の雰囲気が言葉と書体に現れているように感じました。表現のきざしとそれを支えるまなざしに満ちた、大賞にふさわしい作品です。／岡部 信幸

「らっふる名言集」という括りで提出された一連の書。その強度は、書道的な上手さではなく書かれた言葉にある。その言葉は、ある場面に立ち会った際に、文章として整理できない言葉、もしくは普段なら心にしまっておくような本音、小説であれば括弧書きで記述されるような表に出てこない言葉たちだ。それらが本人が書いたであろう直筆で書かれることで、その状況を想像し、共感と笑いがやってくる。
「まなざし」という観点で言うと、ケアスタッフやメンバー同志が分け隔てなく、そのシニカルな一言の対象になりツッコミを入れられていること、「きざし」という観点で言うと、捉え方を間違えると喧嘩になりそうなきわどい言葉もあるが、それを平気で「らっふる」という空間へ放り出せる雰囲気が良かった。単に上手い下手では測りきれない作品の強度があり、その既存の価値観の外側にある面白さを支えているのが「らっふる」の空気感と言うのがとても可能性を感じたからだ。
これからもどんどん、我々の凝り固まった既成概念にツッコミを入れて欲しい。　／吉田 勝信

きざしと まなざし 山形県知事賞

「お花の街／お花畑でひなたぼっこしている動物達」
齋藤 真澄

まなざしコメント

❶「お花の街」
お花の街の中のことを考えながら、一歩、一歩、工夫しながら描きました。家族や近所、お世話になっている、すべてのまわりの人達が、元気を出していただけるような作品を心がけました。大好きなおじいちゃんも米寿までありがとう！！ すべて、手作業で作成しお花の絵のまわりの色紙も手でちぎって作っています。
／もみじが丘

❷「お花畑でひなたぼっこしている動物達」
「色紙くださーい！」と、いつも机の上には、色鉛筆、のり、折り紙の3点セットを準備して、お絵かきを楽しんでいます。「壁に貼るのと、机に飾るのと、どっちがいいですか？」と確認してプレゼントしてくれます。描いた絵は自分用ではなく必ず誰かにプレゼントしています。お花のまわりに動物たちが集まっておしゃべりをしている絵を描くことが多いです。そして、ただ描くだけではなく、折り紙で飾ります。ハサミを使うことなく、自分の手でビリビリ切って貼りつけています。貼る色の組み合わせや、貼る場所にも本人なりのこだわりを持って完成させています。「ありがとう」のお礼の言葉が、更に創作意欲をかきたてるようです。
／もみじが丘

❶

❷

審査員のまなざしコメント

何度も何度もおなじモチーフを描く。そして、自分の中のイメージを求める。その真摯さと、だからこそ現れた“誰もまだ見たことがないようなあたらしい形”に惹かれます。これからもたくさんつくって、斎藤さんが見たいものを追求してほしいです。　／瀬尾 夏美

きざしと まなざし 岡部 信幸賞

「動物シリーズ」鈴木 智

まなざしコメント

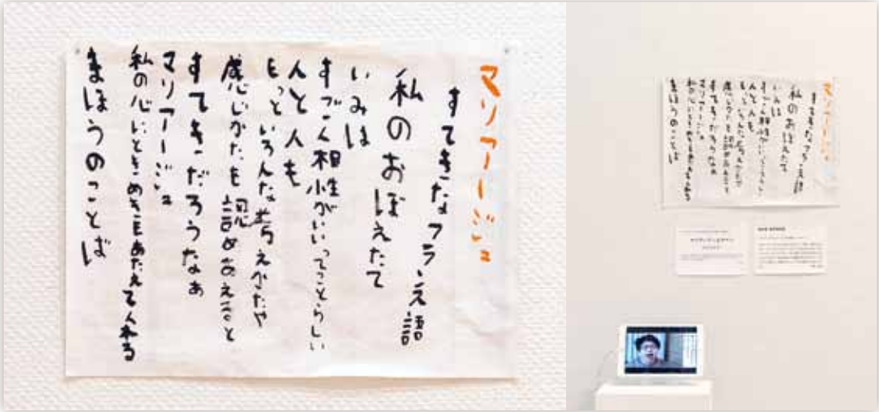
高校在学中は書道の全国大会で金賞を受賞されている方である。筆の墨を絵具に替えて日々作品作りに励まれています。人物画、風景画など、何にでもその時のインスピレーションでこなされています。　／向陽園

審査員のまなざしコメント

ハゲワシ、ウサギ、クマ、ヒヨコ、いずれもが画面の中央に大きく描かれ、その色彩感覚が素晴らしいと感じました。写真をもとに描いているようですが、鈴木さんが写真から何を見てどう描きたかったのかが、素早い筆の動きや背景の塗りにうかがえ、絵画ならではの表現になっています。風景のシリーズもありましたが、いずれにも描くという原点と表現のきざしが感じられました。これからもどんどん描いてください。　／岡部 信幸

きざしと まなざし 瀬尾 夏美賞

「マリアージュふでペン／詩を朗読してみました」 みさちゅうー



まなざしコメント

こんかいは、詩の中にフランス語を入れました。私のおぼえたてをふでペンでかくことにちょうせんしてとてもむずかしかったけど、さくひんができたあと、がんばってよかったなと思いました。 ／みさちゅうー

詩をはじめてろうどくしました。かんじょうをこめてよむのは、とてもむずかしかったし、きんちょうしました。アナウンサーはすごいです。／みさちゅうー

審査員のまなざしコメント

そのメッセージのつよさに驚かされながら、同時に書かれた文字ひとつひとつのやわらかさ、たのしさが見る者を喜ばせ、励ましてくれる。そしてなにより、自らが書いたその文字をひとつひとつなぞるように丁寧に読みあげる朗読の声がすばらしい。スタッフさんが制作した映像もみさちゅうーさんの魅力を引き出しています。 ／瀬尾 夏美

きざしと まなざし 吉田 勝信賞

「ビーズ細工のような、カラフルな世界！」 志田 惟子

まなざしコメント

作品を制作されたのは、ダウン症のご利用者様です。明るく元気な、色彩感覚豊かな方で、着る服も毎日ご自分で選び、かわいくコーディネートされています。貼り絵が得意で、下絵に合わせて貼るよりも、ご自分の感覚で丁寧に並べて貼ることを楽しんでいます。毎日の作品を並べたら、惟子さんのカラフルな内面が見えてくるようでした。この素敵な色合いを皆さんに見ていただきたいと思いました。(ご本人と一緒に題名と作品を並べる順番を決めました。) ／かたぐるま

審査員のまなざしコメント

よく貼り絵は見かけますが、何かを描くための筆記用具ではなく、色紙をカラーチップ(色の面)として捉え、その組合せで美しいものを探っているようでした。服をコーディネートするように、カラーチップをコンポジションした毎日の作品。今回は、さらにそれを組合せて、より大きな色の面を探っています。その結果、作品が完成ではなく、作品を素材にレイアウトした面、空間が作品化していくような「きざし」を感じました。その「きざし」は、メンバーとケアスタッフの関係性という「まなざし」があり立ち上がったものでした。 ／吉田 勝信

きざしと まなざし halken LLP賞

「昔のふるさと」 大泉 憲司

まなざしコメント

山形県新庄市出身。山形で生まれ宮城県に移るまでの思い出をここ 2、3 年前から描き始めました。その中から、最上公園の中にあった「公園亭」の店の中の様子を描いた作品を今回応募しました。薄らいでいく記憶を絵の中に残すことを続けていきます。 ／しじゅうから at work

審査員のまなざしコメント

丁寧に配置された素材の一つひとつに愛着を感じます。特に、作者がコンセントに着目しているところなど、作者だけが知るであろうこだわりと、それを拾い上げるまなざしが良いです。時間と空間を超えて、幸せな時間が刻まれているようです。 ／halken LLP

オーディエンス賞

「ないたあかおに」 若宮病院共同制作グループ

若宮病院に入院、もしくは外来通院し作業療法を受けている方々が取り組んでいる「共同制作」の中の一作品。ロールモザイクという若宮病院オリジナルの創作手法です。この作品は患者さんとの創作に向けての話合いで山形の童話を作品にするというアイディアが生まれ、今回の作品となりました。下絵の絵のデザインも患者さんが行い、額の制作も他の患者さんが行っています。作品の工程は色画用紙を短冊状に切り、それを丸めてピースにして下絵に張り付けています。切る、丸める、貼るという作業を参加する方々の技量や好みに合わせて、参加者みんなが認め合いながら制作するという「主体性の機会と役割のある暮らしをこの時間で改めて手に入れる」心の回復に向けた取り組みの形となっています。

／若宮病院共同制作グループ

来場者からのコメント（気に入ったところ）

- やさしさあたたかさが伝わります。集中して取り組んでいる姿が目の前に見えます。
- 鬼の表情が良いです。・絵の構成が良いです。
- 細かい作業と全体の美しさ。・配色や人物の表情。
- 細かな作業をみんなで協力してつくり上げてあり、とても色鮮かな作品になっていて、思わず目を奪われました。

入　選

「捨てられなかったスニーカー」
餅つきうさぎ

山形県の庄内にある身体障がい者の施設で暮らしています。日々、空いた時間を使って作品作りに取り組んでいます。私の作品は、自分が体験したことを物語にしています。今回の作品は３年前に、私の大好きなお母さんが亡くなってしまった時の悲しみを物語にこめました。　／餅つきうさぎ

うさぎさんの大切な記憶が丁寧に綴られていて、読む者を引き込む。お母さんご自身と、お母さんを想う娘さんの気持ちがまっすぐに伝わってくる、いい文章だと思います。今度は挿絵も、うさぎさんご自身が描いてみてもいいかもしれないですね。　／瀬尾 夏美

「竹林」
阿部 勝康

毎年古くからの知り合いから竹の子をいただいております。母親の実家の裏にも小さな竹林がありました。小学生の頃に見た記憶をたよりにクレヨンの線を指でなぞり、こすりながら描いてみました。　／みらいず

子どもの頃に見た風景を、まさに手探りであらわす。その手跡自体が線をつなぎ、色をつくり、絵を構成している。ふたつ寄り添うように生えたタケノコはまるまると太っておいしそう。黒いクレヨン一色で描かれていることでかえって、見る者たちは、青々とした竹の色味を自由に想像できる。大切な記憶たち、また、絵にしてみてほしいです。　／瀬尾 夏美

「タイトルなし」
石川 秋子

自分の色を選びながら個性豊かに自分の想いで文字をかきそれがしりとりでつながっている作品です。本人ももともと絵を描いたり、創作することが大好きです。
／なかやま にじの丘

一般的なしりとりの定義を緩やかに崩した独自の方法論に、その発想の柔らかさを感じました。言葉の終わりと始まりの同一性とその繋ぎ方は、その都度の都合により自由に解釈され、言葉同士が楽しく合わさり思わず声に出して読みたくなってしまいます。まなざし側の解釈の多様性を喚起させる作品です。　／ halkenLLP

「バッグと箱」
丸藤 菊夫

山形県酒田市出身。手先の器用さや、仕事の早さは若い人に負けないぐらい早いです。丸藤さんの年齢を知ると、聞いた人は驚きます。自分で描いた絵柄を使ってバッグや袋などを作り始め、最近では作業所の仲間の描いたものを使って作品を作ったりしています。
／しじゅうから at work

規則的なマークがびっしりと書かれている紙を、さらに折って紐状にし、それを編み込んでカバンなどに仕上げているようです。制作のプロセスごとに、何度も繰り返される作業に没頭している姿が目に浮かび、まなざす側もその作業量に圧倒されるのでしょう。とても家庭的で身近な素材と手法を用いながらも、卓越した技術と世界感をもったたたずまいに独特の魅力を感じます。
／ halkenLLP

「トイ・ワールド・タウン」斉藤 諒

いつもマジックか鉛筆で消しゴムは一切使わず、大好きなキャラクターを描くのが好きな自閉症の息子です。毎日のように描いているのがウルトラマンの怪獣たち。かわいいアニメキャラも好きでノートいっぱいに描いています。今回はキャラ無しでの古代～未来へのワールドタウンを描きました。左下の山並みから描き始めて上へ、右へと世界を広げて描く様は横で見ていて私が時間を忘れてしまうほど…立体的に描いた街並みや城、トンネルや森を境にどんどん変わる風景のトイ・ワールドです。細かいところまでよく見て楽しんでもらいたい作品です。　／保護者

鉛筆で描かれた線を目で追っていくとその世界に迷いこむような不思議な魅力を感じます。コメントによれば、いつも大好きなキャラクターをノートいっぱいに描いているそうですが、そのキャラクターの視線で街を歩き回るような感じが鉛筆の線に現れているようにも思えました。同時に街を高い所から見下ろしたような視点は、世界を客観的に捉える別の眼差しもうかがえます。「古代から未来へのワールドタウン」が３枚によって表現されていますが、斉藤さんが描く街の未来がこれからどんな風に変貌していくのか、もっと見てみたい気持ちになりました。　／岡部 信幸

「イルカとシャチ」
川村 佳祐

今回は、「イルカ」と「シャチ」を描きました。「イルカ」は、やさしく描きました。「イルカ」で一番好きなところは、主役と青い海です。「イルカ」は、ニコニコしています。「シャチ」は、強く見えるように大きく描いてみました。一番好きなところは、顔と黒いしっぽのところと「シャチ」の体の青く見えるところです。　／川村 佳祐

イルカが青い海の中を楽しそうな表情で泳いでいる様子が伝わってきます。一方シャチは大きな紙に背景を銀に塗り、黒と青を使い迫力いっぱいに描かれています。イルカの口元の泡やヒレの部分にある赤や黒や青の小さい丸で緻密に描かれた文様や、シャチのヒレの蜘蛛巣状の網目とサインペンやマジックで打たれた点の描写には、形やまわりの色との対比やバランスなど、構成を考えながらいろいろな画材を使って表現する工夫が感じられ、独自の世界が出来あがっています。
／ 岡部 信幸

「銀河鉄道」
平 祐哉

きれいな星空を銀河鉄道に乗って世界中を旅行したいと思い描きました。今はどこにも行けないので世界が落ち着いたらと自分の一番の夢を描きました。成長と共に描く内容にも少しずつ変化が出てきたようです。　／保護者

まっすぐに引かれた線、きっちりと塗られた色。青と黄色、黒と灰色のコントラスト、どれもとってもうつくしい。何より、ひとつひとつ丁寧にあらわされた黄色い星々と大きな月が輝いていて、まだ見ぬ地へと旅することのワクワク感が伝わってくる。見たい景色を希求し、表現する力が毎年高まっていると感じます。これからも、いっぱい描いてほしいです。
／瀬尾 夏美

「かわいいもの」
齋藤 知美

歌詞を文字にしたり、大好きなことはメモ帳にたくさん書いています。メモ帳を見ながら書いていることを、人に伝えるのが好き。歌も一緒に歌いたいとスタッフと歌ったりします。作品は、長年取り組んでおり、大好きな人や大好きなキャラターやものを描いています。創造性豊かな表現に周りをいつも魅了します。描いた作品は、たくさんの人に見てもらいたいと思って描かれています。　／デイサポート天花

黒一色の絵や、線で描いた部分に色を塗ったり、線で描いた絵に上から分割するように色をつけた作品など、さまざまなバリエーションが見られます。いずれも丁寧に描かれており、誰かに伝えたい、見てもらいたいという齋藤さんの気持ちが伝わってきます。同じ紙の大きさの中で展開していく多彩な内容には、長年にわたる周りの人々とのやり取りと信頼関係が育んだものが現れているように思います。
／ 岡部 信幸

「ぼくのお母さん」
柿崎 忍

あらゆることに目もくれず、無心になってボールペンをいっぱい走らせました。2020 年から突然描き始めましたが、自分でも気が付くと書いてしまいます。ここには、お母さんの顔もあります。好きな支援員の顔もあります。これからもいーっぱい描きたいな。　／なごみ

一色のペンで描き埋め尽くされた紙面。その空白に顔が描かれています。青、緑、赤、黒、それぞれの色で別々の紙に描かれた作品が重ねて貼ってありました。描き埋め尽くされた面に突然の余白と顔、そのコントラストに「きざし」を感じ、提出されたテキストを読みました。本人の視点で書かれた文章には、2020年から突然描き始めたこと、母やケアスタッフの顔だということが書いてありました。　／吉田 勝信

「タイトルなし」
秋葉 勇人

自分の落ちつける環境・好きなタイミングで本人の信頼している職員と一緒に自分が好きな働く車を描きました。自分の個性を生かした、素晴らしい作品に仕上がりました。　／デイサポートにじの丘

厚みのある木の上にも横にも、車や数字や文字が描かれた働く車は、紙に描かれたものより物体としての存在感が感じられます。これからも気に入った車をたくさん作り、それらを横に連ねたり、上に積み上げると、さまざまな働きが協力し合う立体的な世界が生まれると思います。どんどん作ってください。
／ 岡部 信幸

「お父さんお仕事有難う」
長濱 哲哉

単身赴任のお父さんにご飯を一緒に届けた時にその場で描いたものたちです。メニューを書いたり、その時に自分の好きな車を描いてみたり…冷蔵庫に貼ってあるのを見ると哲哉と会話してるみたいだな～と思います。　／保護者

作品を見たときに最初に感じたのは、プレゼンテーションが上手だなということでした。作者が描いた、絵と文章のメモ書きとともに冷蔵庫にメモ書きが貼られていた写真がセットで並んでいました。最初は冷蔵庫に貼って使っているコミュニケーション・ツールとしてのメモ書きだったのかなと思いましたが、テキストを読むと赴任先の父へご飯を届けた際に描いたメモ書きだそうです。それを父が捨てるのが忍びなく、冷蔵庫に貼っている様子の写真だということがわかりました。作家本人がこのメモ書きを書くことで自身の考えが伝わることがわかったことでパニックが少なくなったということでした。自身の障害や家族の関係性の中で立ち上がった、生きる術としてのメモ書き。その視点や関係性を「まなざし」として評価した作品です。
／吉田 勝信

「紙袋」
須藤 由佳

須藤さんがさくらんぼ共生園に通所するようになり１年。絵を描くことに興味を持たれ、その後絵を活用した紙袋づくりにお誘いしたところ、継続的に創作に取り組まれるようになりました。創った紙袋は、日によって描かれる絵の雰囲気がガラリと異っていたり、パーツの組み合わせ方にもムラがあったりするのですが、言葉少ない須藤さんのその日の気持ちを現してるのかな、と思います。　／さくらんぼ共生園

作者の方は通所を始めて1年間が経ったのだそうです。最初は絵を描くことに興味があり、次にケアスタッフの勧めで、絵を素材に袋を作ることへ創作活動が移っていったそうです。本公募展へは、その袋が提出されました。おそらく、まだまだ作者の表現は変化を続けていくのではないかと思います。他者が大勢いる福祉施設へ通いはじめ、自己表現から始まり、現在は他者の道具になる物を作っている。誰かの道具を作るということは、素材となる物という他者や袋を使う人々といった他者が存在し、道具を媒介に自分の外側の世界につながる術になります。この徐々に個人が開かれていく流れに可能性を感じ票を入れました。
／ 岡部 信幸

「CDリスト」 今野 僚大

事業所の自分の机にて、正面には新しい紙、その向こうにペン類、右側には今まで描き始めたCDリストの紙の山。それを1枚ずつゆっくりと左側へ移していく。移していく中で、気になる曲名を見つけると、新しい紙に描きこんでいく。その繰り返しで、彼の好きな曲は混ぜ合わされて増えていきます。 ／保護者

色鉛筆で書かれた何かのリスト。複数の紙がドン、ドンと積まれていました。一見、なんのリストかはわかりませんがよく読むと音楽のリストかなと思わせる言葉があります。何枚かめくると同じ曲名がちらほら見えます。提出されたテキストは、親御さんの目線で書かれていました。白紙を自分の前におき、これまでに書いた膨大なミュージック・リストを右から左に移し、何か気になった曲名があるとそれを目の前にある「今日のミュージック・リスト」に書き加えていく。その日の気分で好きな曲を組みあわせたアルバムを作っているような作品でした。我が子が毎日行なう日課をよく理解している親の「まなざし」があり、その関係性を評価した作品です。 ／吉田 勝信

「タイトルなし」 富樫 マリア

この方の夢は、イラストレーターになり、お金を稼ぐことです！ご自分の世界観の中で個性的な絵をかくことが得意です。今回の作品は様々な色を使い、個性的な作品になっていると感じました。 ／デイサポートさくら

コメントには作者がイラストレーターになりお金を稼ぎたいという意欲があることが書いてありました。作品を見ると造形が不思議な樹のようなものを描いた作品とデフォルメされた夏野菜やかぼちゃが描いた作品があります。デフォルメの仕方が面白くて、詳しく伺うと、樹は想像で描き、野菜は見ながら描いたと言います。イラストレーションを生業とし、稼ぐというときに「デザイナーが使う」という選択肢に考えるならば、実物を見ながら描く方の作品が、面白さ：伝達性＝4：6といった具合で扱いやすく良いと思います。 ／吉田 勝信

「めろんあじです。色んなあじです。」 山口 小夜子

最近のブームは「ちゅんちゅん」というフレーズ。スズメか？！仲間からは『ガハク』と呼ばれ、わたしの会社を代表するアーティストの1人です。毎日、楽しそうにニコニコしながら、時には真剣なまなざしで絵や、手織りに取りくまれている小夜子さん。色んなあじのキャンディかな？どんなあじかな？食べてみたいな～！ ／わたしの会社

めろんあじ、いろんなあじ。いったいこれはなんだろう。想像していると、だんだん楽しくなる。いつか、真ん中にデン！と描かれたこのまあるい物体を、誰かと一緒にながめながら、あれこれ語り合ってみたくなりました。 ／瀬尾 夏美

「窓から見た景色」 國分 淳子

山移動中の車内から見える看板や文字をいつも楽しみながら眺めており、思い出しながらスケッチブックに描きためています。完成すると作品の文字を声に出して周りの人に教えてくれます。 ／まある

文字と文字の微妙な重なり、色と色の繊細な距離から、作家が見てきた景色がレイヤーとなって重なっているように感じます。景色を心に止めることは、目に見えた風景そのものを見つめるだけではないことを気づかせてくれます。まなざす側の気づきを呼び起こしてくれる作品と言えるでしょう。 ／ halkenLLP

「僕の夢」 横川 聖歩

自分に車の免許があったら乗ってみたいと思うトラックをかきました。かっこよくてキラキラ光っている所が大好きです。いつか免許をとって乗りたいです。 ／横川 聖歩

外観のイメージから、まだ見ぬ内装が繰り広げられるのではないかという期待感を感じ、デコトラのまだ描かれていない内装が気になりました。いつの間にかやり過ぎてしまうデコレーションのように、夢も際限なく広がることが感じられ、それに寄り添っていこうとするまなざしも大変良いです。 ／ halkenLLP

「シクラメン」 五十嵐 真也

シクラメンをかきました。冬の花だな～って思ってかきました。土の色をがんばってかきました。赤い花の色は元気だからあふれるくらいにかきました。／五十嵐 真也

画面の赤がまっすぐに飛び込んでくる。そして力強いクレヨンのタッチと、渋い色味の組み合わせが印象的。これは、シクラメンの花だという。たしかにこの絵は、冬の絵だとわたしも思う。五十嵐さんは、モチーフと、そのものが持つイメージを同時に現してしまう。これはすごいことだ。これからも、いろんな、好きなものをたくさん描いてほしい。 ／瀬尾 夏美

「カラーボール（パート7）」「いろどり（パート5）」「万華鏡（パート5）」 瀬田 健治

緻密な線と色彩が根気強く描かれ、それを拾い上げたまなざしも見えてきます。一見すると機械的なタッチのように見えますが、そうではなく、どこか有機的な緩やかさを包容しているように感じます。心地の良い万華鏡を覗くようで、今にも動き出すのではないかと、作品の世界観に引き込まれました。 ／ halkenLLP

「夢幻」 鈴木 千賀子

いつもなら通りすぎてしまう日常の風景。でも、少し足を止めると、そこにはたくさんの「非日常」の風景がある。現実なのか、夢幻なのか。そんな世界を表現したくて撮影しました。見た人によって、どう見えるのか？それが、いろいろな世界を見せてくれると思います。 ／鈴木 千賀子

モノトーンの樹皮の接写と遠くから眺められた枯木、そして樹皮を連想させる銀色の剥がれ落ちる物体。なんでもない日常の風景を、鈴木さんはカメラを通して見つめ、「非日常」の世界を表現しています。カメラはモノの表面を写し取る機械ですが、鈴木さんの作品は、確かにそこにあったはずの光景の背後にある気配のようなものをも感じさせます。今は誰でもスマホで簡単に写真を撮りすぐ画面で確認ができる時代ですが、写真（プリント）表現の奥深さを感じさせてくれます。 ／岡部 信幸

相談

［関連イベント］

おめでとう&相談day

昨年度に引き続き、悠創館（山形市）での展示期間中には関連イベントとして作家と審査員との交流・相談時間を設け、5日間で16名の作家の参加がありました。審査員は入賞者に個別に賞状を渡して作品について直接コメントする一方、それぞれ1日ずつ展示室に滞在。出展者から活動についての相談を自由に受け付けられるようにするなど、作家と審査員との交流が生まれる場づくりを行いました。

きざしと まなざし 審査員総括

瀬尾 夏美
アーティスト

「きざしと まなざし」という名前を持つこの公募展に携わって 4 年が経ちます。“つくる人”と“まなざす人”による協働作業の連なりがあってこそ、表現は社会に現れてくる。それは、関わる人たちの障害の有無に関わらず、とても本質的なことですが、意外と言葉にされていないようにも思います。“つくる人”がいくら素晴らしい作品をつくってもそれを見つける人がいなければ社会に広まっていかないし、“まなざす人” は表現が生まれる瞬間に立ち会うことで感動したり元気になったりする。両者は互いに支えながら暮らしていて、その先に、見る人たちがいます。

「きざしとまなざし」の会場では、見る人たちが刺激を受け、私も作りたい！と思ったり、あの人が作っているものも面白いから展示してもらおう！と気がついたり、新たな “つくる人”と“まなざす人”が生まれる場にもなっています。山形という土地で、そういった動きが連なり、着実に広がっていっていることを感じています。

新型コロナウイルス感染拡大の影響で、集まることが難しい日々が長く続いています。ですが、実際に展示会場にみなさんが集い、作品を介して予期せぬ出会いや再会があり、次のアイディアが生まれていくことの豊かさは、決して手放さずにいたいです。山形で育まれている“表現 ” に関わる本質的な実践と、“つくる人”や “まなざす人” たちをこれからも応援します。

halken LLP
クリエイティブデュオ
アイハラ ケンジ・三浦 晴子

大泉憲司さんの《昔のふるさと》が印象に残っています。小瓶や調理器具などが陳列されたお店のような空間が描かれた作品です。原色で染めたシンプルな小瓶や器は、木のような温もりを感じる机に丁寧に陳列され、上から下から横からと、縦横無尽のパースペクティブで構成されています。さらにこの作品を魅力的なものにしているのは、冷蔵庫やかき氷機から伸びたコードなど、一見すると見過ごされてしまうようなモチーフが存在感を帯びて配置されていることです。丁寧な観察とともに、固定概念に囚われない素直な価値観に、心が洗われるように感じました。また、大泉さんは宮城県からの応募で、この作品は生まれ故郷である山形に想いを馳せて描かれているようでした。そのことも相まってか、時間や空間を超えて故郷を心に留めている姿勢に引き込まれてしまいました。また、毎回のように応募されている方々の作品にも目が止まりました。その中でも山口小夜子さんの《めろんあじです。色んなあじです。》、鈴木智さんの《動物シリーズ》には大変な驚きがありました。毎回の応募の度に、表現の変化やバリエーションが感じられることもこの公募展の楽しみのひとつかもしれません。本展では応募作品が全て展示されますが、回を重ねるごとに見る人それぞれの価値観による「まなざし」も育まれていたのかもしれません。ここでも、表現の「きざし」とそれに寄り添う「まなざし」を再確認することができたようです。

（halkenLLP 三浦 晴子）

岡部 信幸
山形美術館副館長 兼 学芸課長

「やまがた障がい者芸術作品公募展」の審査を今年も担当しました。新型コロナウイルス感染症感染防止のため、審査員が別々に審査を行い、後日 ZOOM での合議によって最終選考が行われました。審査会場には絵画やイラストや書、デザインや写真、そしてオブジェなど、作者の「つくりたい」「表現したい」という思いに溢れたもの、日々の暮らしの中で反復される行為が顕著なものなど、多彩な作品が並んでいました。「きざしとまなざし」をテーマとする審査にあたっては、何をどう表現しているかについて、創作された作品と使われている画材や素材と技法の関係からじっくりと見つめ、さらに創作の傍で見守る家族や周りの人とのやりとりをポイントにしました。

最終選考で議論になった一つが、作品性についてでした。表現したいという衝動や意図が、見る人に共感をもたらす作品にまで至っているかという判断の難しい問題です。図工と美術の違いといえるかもしれません。公募展である点で、コンセプト―素材・技法―作品の関係が最適な作品であることが求められる一方で、「表現のきざしとそれを支えるまなざし」の観点から、例えば行為の反復にとどまるような作品であっても、そこに未知のアートの兆しを見出すこともできるように思います。

普段の生活の中で、家族や支援者と作者が「作ること」と「見ること」と「対話すること」を通じ、素材や形式をどんどん改変していくことで、表現行為のバリエーションの広がりと深みが進み、作られたものが未だ見たことのないものへ飛躍することにつながるのではないでしょうか。その意味で、作品の展示の際の来場者との交流や、五感を働かせる身体を使ったワークショップも有効な機会になると思います。新たな表現のきざしを媒介に、協働するさまざまな人々の感性とアートの可能性を開いていく「場」として、本展の試みがますますその意義を増していくのではないでしょうか。

吉田 勝信
グラフィックデザイナー

私は山に入り食料などを採集している。例えば、薬の素材になる植物の薬効が一番強いのは土用の季節に採集したときだ。それは梅雨の後に気温が上がり土中の水分が減り、同時に植物の体内の水分も少なくなり薬効となる成分が濃縮されるからだ。このように、質の高い薬を作ろうと思うと、おのずと地勢や生態系、そのメカニズムを身体的に理解することになる。世界への解像度の差が制作物の質を左右する。食糧や薬だけの話ではなく、どんな種類の物を作るときでも世界への解像度が重要になってくる。

場合によっては私の内側の世界のときもある。人はそれぞれの仕方で世界を認識しているだろうし、それぞれが理解している世界の構造もそれぞれ異なっているだろう。その構造へ自分自身がアクセスするとき、ぽろりと表現が立ち上がる。これが「きざし」としたとき、それを他者へ伝えるのはなかなか容易ではない。

「まなざし」というのは「きざし」=「その人の世界の見方」に触れ、部分的だとしてもその人の世界を認識する術（すべ）や構造を理解している状態を指すのではないかと思う。

そして、「まなざし」は「きざし」をその通りに分かることが終着点ではなく、分からないから出発し、理解しようとすることでなにか別の理解ができる。この過程で「きざし」が増幅し世界が広がっていくことが面白いのだと思う。

人材

ネットワーク

［関連イベント・ワークショップ］きざしとまなざし

［関連イベント］

「ダンスのきざし／からだでかんじる」

子どもから大人までの希望者が参加できるダンスワークショップを、屋外にて開催しました。悠創の丘にて、寝転がったり、太鼓の音に合わせてはだしで歩いたり、太陽の暖かさや地面の感触を味わいながら、各自が伸び伸びと、からだを動かしました。

■ 開催概要

開催日 ： 2021年11月6日（土）（午前と午後の2回開催）
会　場 ： 悠創の丘（山形市）
ファシリテータ ： 加藤 由美さん（舞踊家/ 舞踊振付家）

芝生のある丘での青空レッスン。太鼓と鈴と紐と etc…アレの次にコレやって etc…と、準備万端。私にとっては初めてお会いする皆さんへのファシリテーション。少し不安もありましたが、いざスタートしてみるとすぐに不安解消。皆さんが自由自在に動いてくださる！ ダンスの兆しどころか、屋外の空気を感じまくってからだが勝手に動いている！ これって、いつも私達が踊っている場踊りの即興ダンスと同じではありませんか！ そっか～、みんなの動きを拾っていけばいいんだと気づき、時間が経つにつれてこの方達とダンス作品を創作してみたい～！と思いが募り、またひとつ夢を持てた貴重な時間となりました。後日、ダンス体験を絵に描いてくださった方がいるという、からだで感じたおまけ付きのアートな時間。ご参加くださった皆さま、ピカピカの体験をありがとうございました。いつかステージで！

加藤 由美さん（舞踊家/ 舞踊振付家）

参加者の声

あの後お日様の絵を描きました。
ほかほか気持ちよかったです。

参加者／奏さん
（アーティスト）

今回参加し、周囲を感じる知覚を「きざし」として捉えることができました。その過程では、まだ互いを知れていない間柄でも視線や言葉を交わし合えたり、動きを真似し合ったり、笑い合えたりしたことが印象的でした。また、障がいのある方（A さん）と取り組む際、「“ 聴覚障がいの ”A さん」ではなく「A さん」自身に向け、知りたい・伝えたいという気持ちが大事だと気付きました。表現について視野を広げられた貴重な時間でした。

学生サポーター／大泉 有理紗さん
（山形大学４年生）

自由に動くとなると、自分はいろいろ考えてしまいます。利用者さんのほうがあまり構えずに自由に動くことが出来ていてすごいなと思いました。

参加者／武田 幹さん
（グループホーム支援センター心音スタッフ）

太鼓の音に乗って
足をトントンと動かしました。
幸せだなぁと思いました。

参加者／鈴木 智さん
（グループホーム支援センター 心音）

［企画展］

「やまがたのきざしとまなざし 2021」

障がいのある作家の表現（=「きざし」）と、それに寄り添う「まなざし」に焦点をあてた 4 回目となる企画展「やまがたのきざしとまなざし 2021」では、山形県内の３名の作家を中心に紹介しました。表現する人と、そこに寄り添う家族や友人との関係性に着目し、寄り添う人の目線による印象的なエピソードやポートレートなどを作品とともに展示。作家を取り巻く環境のなかの「まなざし」を展示で感じていただけるよう工夫し、何気ない日々のなかで表現のきざしを見つけるチカラ（=まなざし）が拡がるようにとの思いを込めました。

自主性を育み、自立を促す、まなざし。

表現する人
佐藤 理恵子さん

寄り添う人
佐藤 貴恵子さん

農業を営む佐藤貴恵子さん理恵子さん親子。理恵子さんの自主性を尊重する、母・貴恵子さんのまなざしの奥には、理恵子さんへの信頼と、本人の自立を自然と促すような環境づくりがあるようです。

佐藤 貴恵子さんの まなざし

野菜の栽培では、種類によって畝 (うね) とのあいだの幅が決まっていますが、ネギの場合は 90 センチ以上です。この幅であれば、溝を掘ったり草むしりしたりすべての作業をまるごと、一畝 (うね) そのままで理恵子に任せることができます。本人も、出来るものをまるごと任されたほうがいいですよね。

理恵子が絵の題材を探しているとき「花の名前、なにがある？」と聞かれ、「バラ」とか「スイセン」と答えました。こちらが先に発言して何かを用意するよりも、理恵子に聞かれてから「それならこれだよ」と答えるようにしています。

理恵子が刺繍をするときは、まず布に絵を描いて、そこに糸を刺していきます。何を描くかだけでなく、どの色の糸を刺すかということも、すべて理恵子が自分一人で決めます。その決めていく過程のなかで、イメージが一つまたひとつと膨らむのではと思っています。私はただ出来上がったものを見て、「がんばったね」と声をかけるだけです。

洗濯物干しや掃除など、毎朝の仕事は確実に実行しないと気持ちがおさまらないようなんですね。小学校から酒田市の特別支援学級に通ったのですが、朝は 6 時半に起きて 7 時過ぎのバスに乗るという規則正しい生活リズムでした。子どもの頃からそういう時間感覚を身体で覚えていったのかもしれません。その中でも 3 年間の寮生活では、「理恵子は時間をちゃんと守るから大丈夫だ」と先生からもお墨付きでした。今も「次なにすっかなあ」ってしょっちゅう考えているのかもしれないです。

もうひとつの まなざし

お宅に飾ってある刺繍が目に入り気になっていたところ、それが理恵子さんの作品である事を知りました。ただただ線を重ねた単純な作品に個性を感じ、その時その時の気持ちを素直に表現していることに感銘をうけました。美術館ではない日常にある作品である事に、心ひかれると同時に、これを何かの形で発表できないかと思うようになりました。そこで、行政の方に携帯で撮った作品を見せたところ、「これはいい！」との反応でした。その方から、作品公募展の情報を教えてもらい、恐る恐るご家族にお話ししてみると、二つ返事で「やってみる」と、柔軟に受け入れてくれました。いつも笑顔で、ただただ自然体の理恵子さんとご家族の姿こそ、この作品のルーツだと思います。

（ 地域包括支援センターケアマネジャー／堀 千秋さん ）
※理恵子さんの祖母の担当スタッフ

佐藤 理恵子 プロフィール

1977年酒田市生まれ。山形県立鶴岡高等養護学校卒業後、水産会社に8年間勤務。会社の廃業を機に家業の農業を手伝うようになる。高校時代に覚えた刺繍を母が勧めたことを機に、午前は農業、午後は刺繍の生活を15年間続けている。祖母が利用している福祉サービス職員に作品を見せたことをきっかけに地元のアート展に出展。以来、さまざまに声がかかるようになり、県内外での出展の機会が増えている。

互いに助け、成長する、きざしとまなざし。

表現する人 長濱 哲哉さん

×

寄り添う人 長濱 志穂さん

仲の良い姉弟の志穂さんと哲哉さん。姉である志穂さんは、弟の哲哉さんの面倒を見ているつもりが、実は自分も弟から助けられているのだと言います。互いに助け成長する姉弟の姿がそこにありました。

もうひとつのまなざし

雨の中で「ザクザク、ザクザク」と言いながら落ち葉を踏んだり、公衆電話ボックスに入っては「もしもーし」と言ってボックスを出て走りまわり、何時間もそれを繰り返す…。私たちは、当時のてっちん（＝哲哉さん）が大好きだった外遊びにとことん付き合いました。志穂さんがすぎのこ（教室）に来たばかりの頃は、てっちんの後を追ってばかりでしたが、彼女にも世話役がつくことで、他の兄弟と一緒に遊んだりする機会も増え、すぎのこにいる時はてっちんのことは気にせず楽しんで帰っていくようになりました。

すぎのこを修了してからはむしろ、私と志穂さんの関係は深まったように思います。一緒にテスト勉強をしたり、志穂さんの演劇を見に行ったこともありました。そんなときでも志穂さんはてっちんの話を楽しそうにしていたのがとても印象的です。

また、てっちんの展示を見に行くのが楽しみで、絵を手段として自己表現するてっちんはカッコよく見えました。てっちんを知り合いに紹介するときは、「絵を描く私の友達」と言っています。てっちんも志穂さんも今では私の大切な友達となりました。

（支援学校教員／鈴木 希菜さん）
※志穂さん、哲哉さん姉弟が幼い頃3年間通っていた
「すぎのこ教室」の元ボランティアスタッフ

長濱 志穂さんのまなざし

今でも時々、感情のコントロールがうまく出来ず大泣きしてしまう事があります。ただ、数時間経つと、てっちん（＝哲哉さん）の心の中で「あ～あ…また泣いちゃったな～」と感じているようで、紙に「昨日はごめんなさい」などと絵を描いてデイサービスのスタッフさんに渡したりしています。それを見ると「なんだ、一人で反省会をしていたんだ」って思うんです。てっちんはずっと幼いままのイメージでしたが、自分がやったことをゆっくり自分なりに咀嚼しているんだと思います。なかなか外に言葉を出せないてっちんにとって、絵は大事なコミュニケーションツールなんだと感じました。

てっちんはしゃべるのが苦手な分、空気を読んだり、人の表情をすごくよく見て、いろんなことを敏感に感じ取っているんです。私が中学校に入学して、不安で部屋で泣いていたときにも、急に踊り始めて笑わせてくれたことがありました。「しほちゃん大丈夫！！ 僕がいるよ！」と言われている感じがしてホッとしたことを覚えています。私が面倒を見ているだけでなく、私もてっちんから助けてもらっていて、それが今の私の強みになっているんだなと思います。

もし目が悪かったら、メガネとかコンタクトとかをつけますよね。それと同じで、苦手なものを補うために、何をするとその人にとって生活しやすくなるかを考えてあげること。苦手なことが駄目なんじゃなくて、克服までいかなくても、どうやったら苦手なことをカバーしながら前に進めるのか。そういう考えは、みんなが生きていくためにとても大切なんだと思います。

長濱 哲哉 プロフィール

2005年山形市生まれ。山形県立村山特別支援学校高等部1年。4歳頃、自閉性の障がいを持つ就学前幼児を支援する「すぎのこ教室」に通い始め、10歳頃からお絵かきボードで自分の気持ちが通じたことを機に絵を描き始める。中学頃からは絵に自身を登場させて願望を描くようになり、その後は作品の発表機会も増え、現在では絵を描くことが自分の気持ちを伝えるコミュニケーションツールの一つになっている。

違いを認め、尊重し、共に考え表現する。

表現する人 大泉 真帆さん

×

寄り添う人 長谷部 康寛さん

写真家の長谷部さんが、生まれつき全盲の真帆さんの絵画作品に感銘を受けたことから、二人の交流が始まりました。お互いに影響を受け合いながら、新しい創造を生み出す試みを行っています。

長谷部 康寛さんのまなざし

はじめて真帆さんに会ったとき、彼女は紙にペンを落とすようにして音を立てて描いていました。そのリズムは、たまに遅くなったり一定になったりと変化するんです。それからザーっと線を描いて、またトントントントンと描くのをずっと繰り返していました。まるで真帆さんの中に流れている音やリズムが具現化されているように感じました。さらに知り合ってみると、自分となにも変わらない、音楽好きの一人の女性だと気づきました。

はじめての共同制作では、真帆さんと一緒にどんな表現ができるだろうと考えました。僕が真帆さんの気持ちを知ろうと、目を閉じてシャッターを押してみたり、試行錯誤を繰り返しましたが、結局のところ、僕が彼女を疑似体験することはできないし、その必要もないという結論に行き着きました。そこで真帆さんの描き方に着目し、手の動きを定点撮影して、その動き全てを写真の中に写り込ませました。結果として、真帆さんと一緒にいた3分間が表現された作品になりました。

それぞれに生きている世界があり、その「当たり前」には新鮮な気づきがありました。相手を正確に「理解する」のは必ずしも必要ではなく、「考えてみる」「知ろうとする」ことで相手を尊重し受け入れることが重要なんだと思います。今は、「どういうふうに描いているんだろう？」と真帆さんの世界を想像することが、共同制作の楽しみの一つとなっています。

もうひとつのまなざし

真帆さんの作品に感動し、生まれつきの全盲者の方が絵を描くってすごいな、どういうことなのか知りたい、という長谷部さんに真帆さんを紹介したことから、二人の交流が始まりました。いつもは長谷部さんが真帆さんの隣に座り、時間をかけてじっくり話をしています。長谷部さんは、好奇心から質問ばかりするのではなく、自分のこともオープンに話されていて、同じ表現者同士が対等に理解し合おうとしている様子でした。ピアノをひく真帆さんを羨望の眼差しで見ている姿や、真帆さんの反応に一喜一憂している姿から、長谷部さんは純粋に真帆さんのファンに見えてくるときがありました。表現を生み出すことが、二人の中心に据えられることで、いろいろな境界を飛び越えられると感じました。

（アートサポートセンター コーディネータ／武田 和恵）
※大泉 真帆 長谷部 康寛二人展「見えるものの向こう側」企画者（→P32）

大泉 真帆 プロフィール

1996年 西村山郡河北町生まれ。山形盲学校を卒業後、寒河江市の福祉事業所「さくらんぼ共生園」で創作活動を行う。陶芸、織物などを体験し、2019年からペンを使って絵を描き始める。生まれつき全盲のため、言葉や今までの経験から色をイメージして描いており、好きな色はピンクと黄色。ピアノやカラオケ、ジャンベなどの音の出るものに対しては特に関心が強い。グループ展、二人展など、意欲的に制作に取り組んでいる。

人材

ネットワーク

発表

地域へ出かけ 一緒にやってみる ［アウトリーチ事業］

ら・ら・らでは、2018年から県内各地域に出向き、福祉、行政、芸術分野などの方がたと連携した実践の仕組みづくりと人材の育成に取り組んでいます。こうしたアウトリーチ事業によって、活動が山形県全体へと拡がり、各地で育つことを目指しています。今年度からは、身体表現のワークショップを実施し、あらたな表現の可能性やネットワークが拡がりました。人材育成事業では、昨年度に引き続き展覧会に合わせた研修会や相談会を各地域のみなさんと連携して企画し、実践を交えて取り組みました。各地それぞれの特色があり、あらたに表現活動中心の事業所もスタートするなど、活動が様ざまに展開しています。

「からだをまなざす・ダンスワークショップやまがた2021」

「きざしとまなざし」展覧会の巡回地である鶴岡、山形、米沢の各団体と連携し、2021 年度は同テーマによる身体表現のワークショップを、オンラインを交えて実施しました。このダンスワークショップは、表現の可能性を拡げることを目的とし、既存の振りに合わせるのではなく、それぞれの身体性や人と人との関係性を大切にしながら行いました。ファシリテータには振付家・ダンサーの砂連尾理さんをオンラインにて招き、山形県内の身体表現に関わる方がたにも現地ファシリテータとして関わっていただくなど、人材育成も目的としています。さらに各地域での取り組みは、映像作家の目線で映像に記録し、県内３地域の展覧会場で上映して発表機会をつくりました。

「まなざす身体の可能性」

砂連尾 理（振付家・ダンサー）

「からだをまなざす」ワークショップは山形県内の鶴岡市、山形市、米沢市の3カ所で開催しました。私は今回ファシリテータとして関わりましたが、コロナ禍ということもあり直接現地には赴かず、東京からオンラインでの参加となりました。ワークショップ参加者とは対面で直に会えないということもあり、私と参加者を繋いで、各地域で私をアシストしてくれる現地のファシリテータや施設、学校職員との身体ワークを含む事前ミーティングを、今回は対面で実施する時以上に丁寧に実施しました。それは、私が現場に入れない、参加者と直接触れ合えない、またワーク中の雰囲気や流れが全て確認出来るわけではない等、そんなオンラインだから発生するいくつもの“ない”を超えていくためには双方がワークに対してのイメージを事前に共有しなければならないと感じたからです。
いわゆる健常であり、またワークを指導する側である我々の間にも何かが出来ないという障害を抱えた今回のワークは、私が一方的にファシリテートするといった関係ではなく、それぞれがそれぞれを補い合う中で行われました。そんなお互いを尊重し合いながら進められたワークでは、現地のファシリテータだけでなくダンスになれていない職員も皆それぞれがその場に参加する人たちの想い、眼差しを想像してワークに取り組んでいるように感じました。彼ら一人一人の参加者への関わりから、それこそ彼らの眼差しは普段以上の丁寧さを持って利用者に向っていたのではないかと感じましたし、また時間の経過と共にその眼差しは自己の身体にも注がれていっているようにも感じられました。そんな柔らかく複数に広がっていった眼差しはそれぞれの身体と心をほぐし、ケアする／されるといった関係性をいつの間にかプレイしあうものへと変化させ、特に何かするでもなくお互いの手を触れ合うだけの状態や、会場を自由に動き回る学生にただ寄り添い歩くといった行為を、まるでダンスするかのように楽しみ合う姿へと変身させていきました。この眼差しがどの地平まで広がり、ここからどんな身振り、ダンス、関係が生まれてくるのでしょうか？ 今回、山形の3地域で展開された「からだをまなざす」からは、まなざす身体から創造される様々な可能性を感じさせてくれるものとなりました。

砂連尾 理さん プロフィール
1991年、寺田みさことダンスユニットを結成。近年はソロ活動を中心に、ドイツの障がい者劇団ティクバとの「Thikwa+Junkan Project」、舞鶴の高齢者との「とつとつダンス」等。2008年度文化庁在外研修員としてベルリンに滞在。著書に『老人ホームで生まれた<とつとつダンス> ― ダンスのような、介護のようなー』（晶文社）。立教大学映像身体学科特任教授。

Tsuruoka
鶴 岡

［鶴 岡］［ダンス］

開催日 ： 2021年9月22日(水)
〈参加者13名〉
会場・パートナー ： もみじが丘
ファシリテータ ：
砂連尾 理さん（振付家・ダンサー）
現地ファシリテータ ：
菊地 将晃さん（Kickin' Dance Fam）

ら・ら・らレポート

まず午前は、周りの人の動きを見て真似てみたり、二人で手を重ねて動いてみました。午後は、午前のそれぞれの動きを参考にからだの相性を見て改めてペアを組みなおし、音楽を聞きながらからだを動かしました。お互いのことをまなざして呼吸や間合いを感じながら手を合わせたり、寄り添いながら動くなど、支援するされるだけではない新しい関係性を感じる時間となりました。普段の行事では積極的に動かない方が、ファシリテータと一緒にみんなの前でダンスを発表するなど、いつもとは違った姿もありました。

実践者の声

- 身体を自由に動かすことが楽しかった。五十嵐 絵里さん（もみじが丘メンバー）
- 男の人と触れ合って踊るのは恥ずかしかったけど、踊りは好きなので楽しかった。齋藤 真澄さん（もみじが丘メンバー）
- 先生！（砂連尾さんと）テレビ！（テレビモニター 越しに会話したことが）楽しかった～！ 佐藤 一成さん（もみじが丘メンバー）

―正解か間違いかは置いておいて、“共に在る”ことをたのしむことは、とても豊かなことー それは、優劣でもなく、“支援する・される”という関係でもなく、お互いの存在・在り方（表現）を丸ごと受け入れる皆さんのあたたかな関係性があったからこそ味わえた豊かさだと感じています。福祉という分野だけでなく、人間同士の関係性が必ずある、この社会で忘れてはならない、大切なことをからだをつかって表現した時間でした。

現地ファシリテータ／菊地 将晃さん
(Kickin' Dance Fam)

今回のワークショップでは、利用者に向ける「まなざし」の大切さを学びました。表情や仕草に意識を向け、相手の呼吸に動きを合わせた型を押し付けないダンスは心を開放してくれることを実感しました。それぞれが自由な動きをしているのに一体感が生まれる感覚に感動しました。誰もが楽しい気持ちで満たされた時間を過ごすことが出来ました。

パートーナー団体／五十嵐 みゆきさん
(もみじが丘スタッフ)

まなざしコメント

ファシリテータ／**砂連尾 理さん**
（振付家・ダンサー）

もみじが丘の職員さんが現場で様々な介助やケアをまず一生懸命やられているなかに僕らが入っていくことで、少し普段と違う文脈の関係ができて、「ケアする／される」という関係性からいったん距離を置けることが、ケアの現場にアートが入ってきて起こるいい作用だと思います。打ち合わせの段階から、ワークは利用者さんのためのワークだけではなく、職員の方々も一緒に何か変化を感じていけるような時間になるといいなと言っていましたが、実際にいい意味でそういう時間になったような感じがしました。私たちの生活や社会では、実は今日のもみじが丘さんのような人たちと一緒に生きていて、普段その豊かな世界を知らない人たちがこの場を見て共有できたときに、その時間が何かに生きて、感じ方が広がっていくんだと思います。そういう視点で社会の人たちすべてが生きられたとき、もっと社会が変わり、もみじが丘さんを取り巻く環境も変わって、それが本当のダイバーシティとかインクルーシブな世界になる。そのために、このワークショップのようなことを積み重ねて、協働していけたらなと思っています。

［山　形］［ ダンス ］

開催日 ： 2021年12月2日(木)、3日(金)
〈参加者 20名〉
会場・パートナー：
デイサポートたんぽぽ工房
ファシリテータ ：
砂連尾 理さん（振付家・ダンサー）
現地ファシリテータ ：
加藤 由美さん（ダンススペース主宰）

ら・ら・らレポート

たんぽぽ工房のメンバーとスタッフがペアになり、画面の向こうの砂連尾さんの動きを真似たり、ペアで手と手や目と目を合わせて動いてみました。メンバーの自由な動きにスタッフが振り回されて動いていて、障がいのあるメンバーが振付師のようなダンス作品も出来ていました。少しずつ、スタッフ側の気持ちやからだがほぐれていく様子が見られました。画面の向こうの砂連尾さんの面白い動きを一緒に行うことが楽しくて、笑顔がたくさん見られる元気な現場でした。

実践者の声

- いろんな手の動きが楽しかった。今度は歌や楽器もやってみたい。
  堀 隼也さん (デイサポートたんぽぽ工房)
- またスタッフと一緒に踊りたいです。 加藤 仁美さん (デイサポートたんぽぽ工房)
- 素敵な時間で、面白かったです。 鈴木 文子さん (デイサポートたんぽぽ工房)

「皆さ～ん、こんにちは
～ジャレオでーす！」
「コ、ン、ニ、チ、ハ～！！」
たんぽぽ工房の皆さんのとても元気の良いご挨拶からスタート！参加の皆さんは初めてのダンスに興味津々。そんなウキウキな雰囲気の中でスタートしたダンスワークショップ。スタッフの皆さんの丁寧で愛情あふれるアテンドと共に、砂連尾さんの「まなざし」からリードされてあれよあれよ、あっという間にラッタッタ～♪皆さん、もうノリノリです！ 皆さんのお姿から、たんぽぽ工房さんの日頃の活動の様子が想像され、これが「まなざす」ということだな～と、そして、アートは何気ない日常の生活の中から生み出されるのだな～と、改めて感じた時間でした。たんぽぽ工房の皆さん、また踊りましょう！

現地ファシリテータ／加藤 由美さん
(ダンススペース主宰)

「緊張」から「解放」へと変わったとき、相手への境界線が曖昧になり心地よく感じました。そして、「わたしとあなたは生かし合う関係」だということも感じることが出来ました。踊ることで、ケアする人、ケアされる人というフレームを外すことをほんの少しですが、体験することが出来たように思います。

パートナー団体／守岡 映さん
(デイサポートたんぽぽ工房)

まなざしコメント

ファシリテータ／**砂連尾 理さん**
（振付家・ダンサー）

やられたなあと思ったのは、みなさんがちょっとずつ関係をシフトさせていたこと。その時にしか生まれない新しい感じをともにつくり合っていくようなことをやられているのかなと見ていて思いました。一人の踊り方は全員と一緒にというのではなく、「この人だからこう」というような、非常に個別性を大事にする時間と関係性と空間になっていたように思います。ダンスを自分の身体だけで捉えるのではなく、キメラのように、関係のなかで二人の身体がどうダンスするかみたいなことを、最後は「ケアする／される」という関係性を越えて、いかに楽しむかという視点でやられていたんじゃないかなと。本当はダンスって、そんなふうに関係性がちょっと変わって、ほぐれ合うと自然と動き合うものだと思うんです。それは魅せるというよりも感じるために、人間は自然と動いちゃう。そういうことが自然発生的にぽっぽっぽっぽっと今回起こっていたと思います。それだけ感受性のある職員の方が多いんじゃないかなというふうに思いました。

［米　沢］［ ダンス ］

開催日 ： 2021年12月15日(水)、16日(木)
〈参加者 20名〉
会場・パートナー：
山形県立米沢養護学校
ファシリテータ ：
砂連尾 理さん（振付家・ダンサー）
現地ファシリテータ ：
渡邉 京子さん（山形心体表現の会 La・シヴァ）

実践者の声

今回のようなものは私自身は初めてでしたが、体験させてもらうと、あ、こういうダンスがあるんだなというか、こういう形の取り組み方があるんだなというのは、私だけでなく今回参加した教員は皆感じたのかなと思いました。いろんな生徒の普段とはちょっと違うような動きも見られてよかったです。最後のYくんなどは、授業中寝っ転がることを止めるような場面がよくあります。でもそこを彼の表現として見ていくような新たな視点があり、Yくんの動きを皆で真似してみようというのがすごく新鮮というか、面白いなと思いました。

パートナー団体／前山 祥子さん
(山形県立米沢養護学校教員)

ら・ら・らレポート

中学部１年生、２年生、３年生が参加してくれました。砂連尾さんの動きを真似てみることから始め、現地ファシリテータがみなさんの動きを感じて相互に影響し合う関わり方を探ります。徐々に参加者も自主性を持って動いてみるようになったり、先生が主役になってみんなで真似てみたり、生徒が主役になって真似をしてみました。最後には、体育館を全部使って走り回り、寝っ転がる方がたの真似をみんなで行うなど、参加者全員がより自由になり、からだの枠が大きく拡がった瞬間がありました。

型にはめてしまうような、こうでなければならないと生徒たちを導いていってしまってるんだなと、ある意味自分たちの自戒も込めて感じました。そうじゃなくて良いんだ、自分の好きなように表現して良いんだ、その型から外れたところで、自分で表現したり動いたり、して良いんだっていう経験を子どもたちができたっていうのは、すごくよかったなと思いました。

パートナー団体／井上 正人さん
(山形県立米沢養護学校 元教員)

広い体育館にテレビが３台設置され、コーディネーターが画面の中にいる不思議な空間で、画面に集中する少し緊張の中でのスタートだった気がしたのですが、動きが始まってすぐにその緊張感が、身体や動きに心傾ける緊張感に変わっていったのがわかりました。「まねる」から始まったダンス。同じ動きの中にも、その人が持つ個の美しさが見える瞬間がいくつもあった気がします。触れる事が難しい制限されていた環境でしたが、その制限が逆にひとり一人を引き立たせていたようにも感じました。きっと、制限から離れた時には、個の美しさが周りとの関係の中でさらに広がりを見せるそんなチームだと確信した２日間でした。

現地ファシリテータ／渡邉 京子さん
(山形心体表現の会 La・シヴァ)

まなざしコメント

ファシリテータ／**砂連尾 理さん**
（振付家・ダンサー）

教育の現場とか福祉や医療の現場というのは、型みたいなものがないと成り立たない部分がありますし、全部を自由にすると収拾がつかないことがいっぱいあって、長い時間をかけて出来上がってきたものだと思うんです。同時にこういうシステムがしっかりしてくればくるほど、システムからこぼれていくことがノイズになったりするような側面があると思います。でもそれを「こうしなければいけない」とするよりも、アートと教育の世界がいい意味で仲良くタッグを組むことが、これからは重要ではと私は感じています。障がい者だけでなく、いろんな国から人が訪れるこれからの日本の社会環境のなかで、日本人だけではないコミュニティや場所が、ますます増えていくと思うんです。そういう時に、例えばワークショップの最後にやったように環境を逆転させていく柔軟さや、一緒に学び合っていくようなことを経験し合いながら、共に成長していけるといいのかなというふうに思っています。そういった意味で、アートは人によって価値基準が異なっていて、それゆえ社会になかなか浸透しない側面もありますけれども、普段とは違う考え方を時に取り入れて、お互いに手を伸ばし合えるようになっていければいいなと思います。

写真 (p21、22、23)／齋藤 達也撮影の動画より

Sakata
酒　田

［酒　田］［展覧会］
サカタアートマルシェ2021「いいいろいろいろ」

■ 開催概要

会　期：2021年9月18日(土)－26日(日)
会　場：酒田市 出羽遊心館
主　催：酒田市、酒田市教育委員会、
　　酒田市文化芸術推進プロジェクト
共　催：やまがたアートサポートセンター ら・ら・ら、
　　社会福祉法人酒田市社会福祉協議会
実施報告／来場者数：652名　出展作品数：123点

ら・ら・らレポート

事前に出展団体、地域のアートディレクターや学芸員、主催者と共に「どんな展覧会にしたいか」を話し合う場をつくったり、展示方法を考える作品持ち寄り相談会を実施しました。作者の思いや作品の魅力を伝えることを大切にしながら創意工夫を繰り返し、出展団体のみなさんと一緒に作品展づくりを行いました。展覧会では、酒田市出身の画家と市民との共同作品「夢傘福」も展示。出羽遊心館の各展示室は、茶室や廊下、床の間といった、背景と融和させたり違いを際立たせることにより、豊かなアート空間となりました。

来場者の声

・出羽遊心館の和の世界に、作品がうまく展示されていて楽しく鑑賞できた。

・案内図が美術展の図鑑のようで、読みごたえがあり、より鑑賞を楽しむことができた。

・作品の素晴らしさはもちろんだが、展示の素晴らしさで作品がより一層輝いて感じた。

実践者の声

本校から18点の作品を出品しました。小学部の縦5m、横6mの大型足跡アートは会場の出羽遊心館に入るとすぐ目に入る真正面の最高の場所に展示していただきました。中学部の生徒が今まで書き溜めた作品の数々は趣のある茶室の中に広げて展示していただくなど、子どもたちの個性豊かな作品が会場で更に輝き、映えるようにと、スタッフの皆さんが1点ずつ展示の仕方を考えてくださったことが大変ありがたく思いました。

出展団体／伊藤 剛さん
(酒田特別支援学校 学習部長)

いろんな人が作品を見てくれて褒めてくれて嬉しかった。今年も作品をつくってだしたいです。

出展者／元木 武弘さん(あらた)

施設の方々との共同制作作品「夢傘福 そら」を展示することができました。新型コロナ感染防止対策の中、直接ワークショップを行うことができず映像によるパーツ制作となりましたが、完成した作品は輝く多くの個性が集まり透き通った空のような美しい作品になったと思います。

ゲスト／佐藤 真生さん (画家)

折り方を教えてもらい毎日楽しく手作業できた。コツコツと作り続けた物が形になって嬉しい。

出展者／Fさん(あらた)

「アートってよくわかんないんだけど、なんか面白いんだよね」そういってもらえるよういつも心がけています。アートには不思議な力があるけど、説明できなくって。でも面白さは伝えていきたい。そのためにはまずは参加してくれている人たちに面白がってもらうことが重要だと考えています。やってる本人たちがまずは楽しまないと。面白がってくれる人たちが増えることでなぜかアートはもっと良くなります。するとまた面白がる人たちが増えるんです。酒田市の中で少しずつ面白がってくれる人が増えてきています。これからもっと増やして行きたいと思っています。

アートディレクター／中島 友彦さん
(映像作家、アートディレクター)

126点のアート作品、本市出身の作家 佐藤真生氏と障がいのある方々との共同作品の展示会。出羽遊心館の各展示室は、茶室や廊下、床の間など、背景と融和させたり違いを際立たせたりしながら広がりのあるアート空間となり、色鮮やかな絵画、鉛筆のみで描かれた緻密なデッサン、迫力のある書や、神秘的な造営物など、多種多様なアートが全館に溢れました。様々な手法で表現された作品は、観る人に命の躍動感を感じさせるとともに、表現活動の大切さを訴えかけていました。

主催者／池田 晶さん
(酒田市教育委員会 社会教育文化課 文化芸術係)

［鶴　岡］［展覧会］
「さあ 咲き誇れ！ ひょうげんの花 2021」

Tsuruoka
鶴　岡

■ 開催概要

会　期：2021年10月1日(金)－10日(日)
会　場：鶴岡アートフォーラム
主　催：鶴岡市
共　催：やまがたアートサポートセンター ら・ら・ら
実施報告／来場者数：967名
　　出展作品数：143点(鶴岡市)、29点(巡回展)

ら・ら・らレポート

出展団体を対象に、講師に学芸員を招き、作品を生かす展示の仕方や見せ方を学ぶ実践研修を開催しました。市民から募集した花の作品を会場中央に展示し「だれもが個性の花を咲かせることができる街を目指して」というテーマを伝えるシンボルとしました。「からだをまなざす ダンスワークショップ@鶴岡」の記録動画の上映、県公募展入賞作品、「きざしとまなざし2021」巡回展も同時に開催。今年度からの取組みとして、オンライン展覧会を開催し、展示作品の紹介やゲストのコメントを交えてYouTubeで配信しました。

来場者の声

・やさしい気持ちになれた。すばらしい作品に出会えて私も表現したいと思った。

・目のつけどころが違います、素直です。嘘がない、だから人に感動を与えます。

・すばらしく、自身も障害者であり、作品を出展したこともあり、作品を作成していこうと意欲を新たにし、また感動しました。

・すごい!! 自分表現に脱帽です。色使い、技法、感覚が良かったです。ありがとう!! 今日は満ちたりた気持ちで家路に向かいます。

実践者の声

僕のイラストのテーマは「ほかの人が思いつかないものを描く」こと。オリジナリティにあふれた、そんなキャラクターをたくさん描いたりするのが大好きです。次回、僕がどんな作品を応募するのかどうか、楽しみに待っていただきたいと思います。

出展者／本間 航さん(翔はばたき)

さまざまな事情で展覧会場に来られない人のため、また、インターネットを通してより多くの人にこの活動に興味を持っていただけたらと思い、オンライン展覧会に関わらせていただきました。なるべく多くの作品を紹介し、展覧会の内容とどのような作品が展示されているのかを伝えるように努めましたが、視聴者の方の反応が分からず、うまく伝えられたかが心配です。多くの方に障がいのある方の表現に関心を持っていただけたら幸いです。

ゲスト／平井鉄寛さん
(鶴岡アートフォーラム館長／学芸員)

全体的に作品制作者の皆さんの力強さが感じられる印象がありました。今回で2度目の参加となりますが、展覧会で吸収した「まなざし」の視点をどう事業所へ持ち帰り、どのようにして次へ繋げていくか、が個人的な今後の展望と課題に感じました。来年度もぜひ継続して参加し、他施設の取り組みや挑戦に触れることで、より良い表現のかたちを学び、気付きへ繋げていければと思いました。

出展団体／岡崎もといさん
(スローワーク新町)

三回目の開催となりました今年度は、新たな試みとして、ぎゃらりーら・ら・らの武田氏、鶴岡アートフォーラム館長の平井氏をゲストにお招きして作品を紹介、解説しながら会場を撮影した動画を作成しYouTubeで公開いたしました。来場の方も含めたくさんの方々に作品を見ていただき、障害のある方もない方も存分に楽しめる展示会となりました。心を動かす作品との出会いの場に携わることができ、とても貴重な経験をさせていただきました。

主催者／原田桃衣さん・赤羽主知さん
(鶴岡市役所 福祉課 障害福祉係)

［米　沢］［ 展覧会 ］
「第3回 わたしとあなたの表現－障がいのある人と関わる人の作品展」

■ 開催概要

会　期：2022年1月9日（日）－16日（日）
会　場：米沢市民ギャラリー ナセBA
主　催：米沢市
共　催：やまがたアートサポートセンター ら・ら・ら
実施報告／来場者数：526名　出展作品数：91点（米沢市）、30点（巡回展）

ら・ら・らレポート

事前研修会や作品持ち寄りの相談会を実施することで、展示企画が生まれたり、訪問調査につながりました。「わたしとあなたのアトリエ」企画では地域のアーティストが福祉事業所・なでらの森に訪問し、動物や人の顔の陶芸作品や、皿形の石膏板を自由に彫るプレート作品を制作。学芸員や地域の作家をゲストに招き、展示や搬入の実践研修も開催しました。展覧会期間中には、イシザワエリさん（アートワークショッププランナー）が企画した「きらきら・ぴかぴか「たいよう」をつくろう」という、自由に参加できるコーナーを設け、来場者も表現し展示してみる仕組みをつくりました。日々様ざまな「たいよう」が増えていき、会場が賑やかになりました。

来場者の声

・本当に制作することに一生懸命で、楽しんでいる気持ちがエネルギーとなって伝わってきました。

・アートって実に自由でいいんだな、そこここに芸術って転がっているんだな、と発見できるところが魅力的です。

実践者の声

・みんなそれぞれの表し方があってとても素敵でした。

・創作スペースもあり、子供たちも参加できて満足していました。

みんなで作って楽しかったです。
また作ってみたいです。

青木 知恵子さん(なでらの森)

顔が上手にかけて良かったです。
お皿も上手にできました。

小柴 拓矢さん(なでらの森)

初めての参加でうまくいくのかなあと思っていました。サッカーのユニホームの背番号を逆に彫ってしまったのが、とても悔しいです。また、このような機会がありましたら参加したいです。

島津 智彦さん(なでらの森)

“びりびりやぶいた紙の山”と見ていたものが、作品の展示に参加して、やぶいた紙の1枚1枚に注目し、“作品”という視点で見ることで、今まで見えていなかった部分まで掘り下げて見ることができたように思います。また、作品の展示を通して、よりその子と時間と心の共有ができたことを嬉しく思いました。

出展団体／石山 沙織さん
(米沢市立ひまわり学園)

3 回目の作品展となり、施設職員の方から出展について積極的にご相談頂くことが増え、アートへの理解が高まっているように感じました。コロナ禍ではありますが、ワークショップを実施して「このような機会が最近なかったので楽しかった」「こういうのも作品になるんだ」と感想を頂きました。今後もいろいろなアートに出会えることを楽しみに継続していきたいと思います。

主催者／小松 真弓さん
(米沢市社会福祉課障がい者支援室)

立ち上げから関わらせていただき、3 年が経ちました。折悪くコロナ 禍での開催が2年続いておりますが、状況の困難さの中であるからこそ、今できることを考え、カタチにしていくことは、福祉においても文化においても共通している課題のように思います。アートディレクションとして何ができているのか、毎回トライアンドエラーですが、少しづつ皆さんと一緒にカタチにしていけているのは喜びです。こういった表現を発表する場が、地域の中で、誰しもに開かれており、文化的であることが、これからも保証されるように考えていきたいと思います。

展覧会ディレクター／菊地 純さん
(イラストレーター／デザイナー)

TOPIC トピック

［米　沢］［ 研修会 ］ 令和3年度 米沢市障がい者権利擁護研修会 ～だれもがいきいきと生活できる米沢をめざして～

「一緒に見つけて考える一人ひとりの可能性 －それぞれの表現と創造力を開花させる支援方法－」

■ 開催概要

開催日：2021年10月15日（金）
会　場：置賜総合文化センター ホール
主　催：米沢市
共催・企画協力：やまがたアートサポートセンター ら・ら・ら
協　力：ARTS SEED OKITAMA（BeHereNow 企画）
話し手：ライラ・カセムさん
（デザイナー／アートディレクター、一般社団法人 シブヤフォント）※オンライン参加
聞き手：武田 和恵
（やまがたアートサポートセンターら・ら・ら コーディネータ）
参加者：109 名（障がいのある方、福祉事業所職員、民生委員、行政関係、医療関係）

ら・ら・らレポート

ライラ・カセムさんを話し手に「一緒に見つけて考える一人ひとりの可能性 - それぞれの表現と創造力を開花させる支援方法-」と題したトーク＆ワークセッションを行いました。まず、福祉施設のアート講師としての実践から生まれた「創造能力を開花する8つの方法」についてのお話があり、次に会場のみなさんと共に、作品や作者の中に秘められた可能性を一緒に考える対話の時間も設けました。また、研修会の記念品として配布したトートバックは、昨年度の米沢市の展覧会企画「わたしとあなたのアトリエ」がきっかけとなり、地域のデザイナーが米沢市の障がいのある作家のイラストを使用して制作されました。

参加者の声

・紙と書く物だけがアート作品になるのではないと気付いた。
ライラさんのすべての方に対して「間違いはない」「瞬間瞬間を楽しむ」という言葉は人としての温かさを感じた。

・アート表現についてとても参考になった。（利用者の）自信につながってほしいと思いながら接する日々で、楽しめる工夫をしていきたいと改めて思った。

・創作活動に取り組む視野が広がる機会となった。とらわれた見方や考えではなく、多くの事にチャレンジしたいと思った。

［最上新庄］［ アトリエ紹介］ 表現する場所「あとりえ・くれよん」スタート!!

生活介護事業所「あとりえ・くれよん」は令和３年５月８日に新庄市に新しく開所しました。生産的な活動ではなかなか力を発揮できない方もいらっしゃる中、表現する活動を軸に社会と関わっていく場として立ち上げました。一人ひとりの強みや個性が活かされ、障がいのある方がたが自分の中にある創造性を大切に生きていける場所になることを願い活動しています。

齊藤 千恵子さん（くれよんはうす 代表理事）

開所する前から職員で何度も打合せを行い、どのように環境設定をするか配置や空間づくりを重点的に考えました。活動内容のメインは創作活動で、まずは活動を通してみなさんの得意なことや好きなことを知り、日々の生活の中で表現される「その人らしさ」を制作に取り入れています。いろいろな選択肢を作ることで、「今日はこれがしたい！」と毎日楽しく制作を行っています。セロハンテープが好きな方、紙をハサミで切るのが好きな方、紐を触るのが好きな方などそれぞれ好きなものも違います。それぞれの個性に合わせた過ごし方を見つけ、その中から自分らしさを「アート」にできたらいいなと考えて日々を過ごしています。毎日過ごす中でゆっくりと変化していく作品。今はまだどんな作品作りができるか利用者のみなさんやスタッフのみんなと試行錯誤しながらの毎日ですが、日々の積み重ねがこれからのいろいろなアートへの第一歩に繋がると信じて頑張っていきたいと思います。素敵な作品と笑顔がたくさんな事業所にしていきたいです。

飛渡　優美さん（あとりえ・くれよんスタッフ）

情報・発信

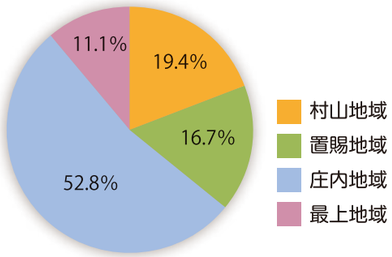
令和3年度 山形県における障がい者芸術文化活動状況のアンケート調査［調査報告］

募集期間：2021年9月15日(水)ー2022年2月28日(月)
回答数：37件(メール配信300件程度、ウェブサイトにて様式ダウンロード)

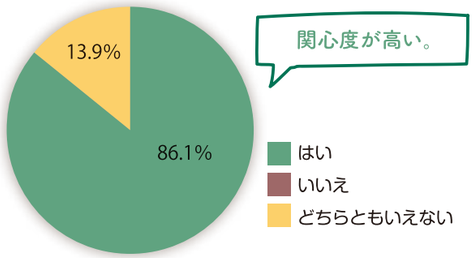
山形県内の障がい者芸術文化活動のさらなる充実のために、個人の作家、家族、福祉事業所、支援学校等を対象に芸術文化活動についての実態調査や要望のアンケート調査を実施し、集計、分析を行いました。

質問1 回答者・団体の所在地エリアを教えてください。

(36件の回答)



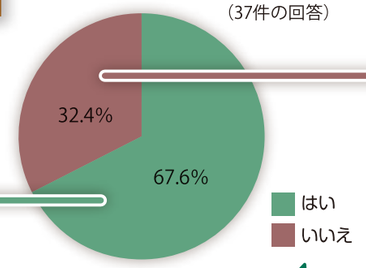
質問2 障がいのある方の芸術文化活動について関心がありますか？(36件の回答)



関心度が高い。

質問3 芸術文化活動を行っていますか？

(37件の回答)

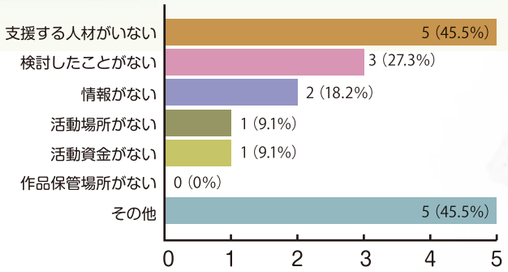


関心があるが活動は行えていない実態が見られる。

■ 質問3で「いいえ」と回答した方へ

質問3-1 行っていない理由を教えてください。

(複数回答可　11件の回答)



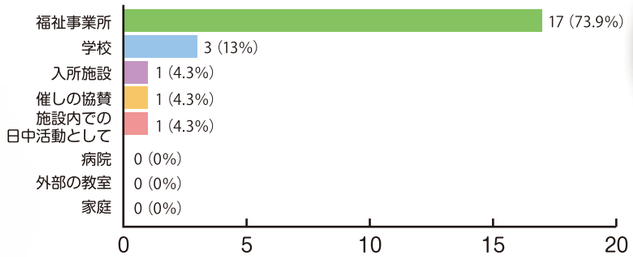
専門的な人材不足が見られる。

※その他
・時間の確保が難しい
・今後活動していく予定
・以前挑戦したが難しかった　他

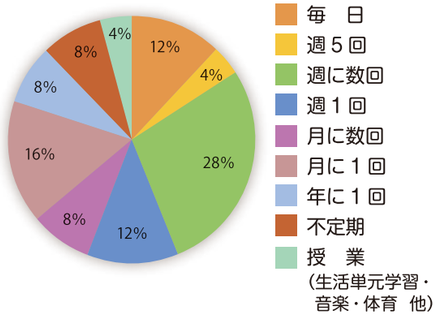
■ 質問3で「はい」と回答した方へ

質問3-2 現在はどのような芸術活動をしていますか？

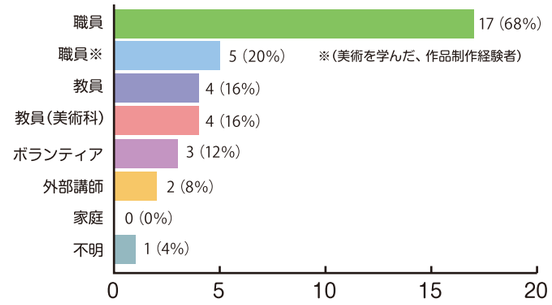
①活動場所 (複数回答可　23件の回答)



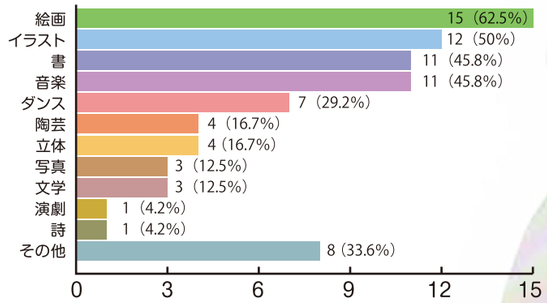
②活動頻度 (25件の回答)



③講師、支援者はいますか？(複数回答可　25件の回答)



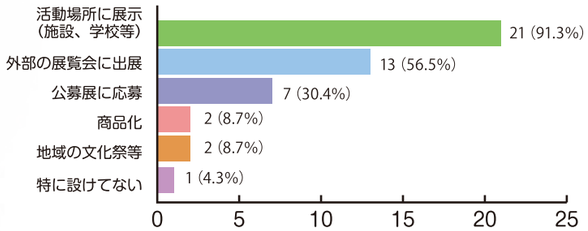
④現在の活動内容 (複数回答可　24件の回答)



※その他／工芸・物語り・生け花・貼り絵・ぬり絵　他

質問4 作品はどのような場で発表していますか？

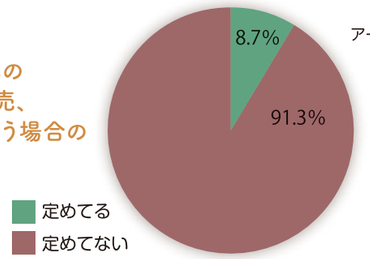
(複数回答可　23件の回答)



質問5

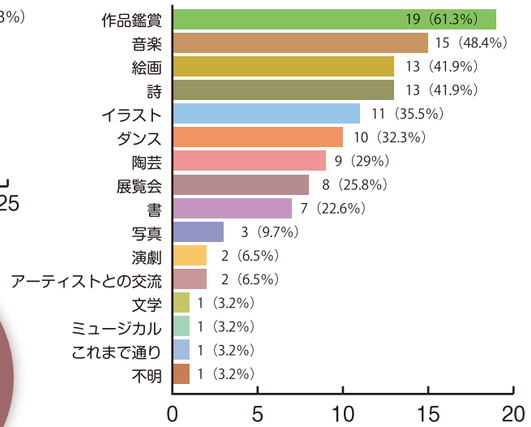
作品の著作権等の帰属、出展、販売、二次使用等を行う場合の取り扱いを定めていますか？

(23件の回答)



質問6 今後どのような芸術活動を行ってみたいですか？

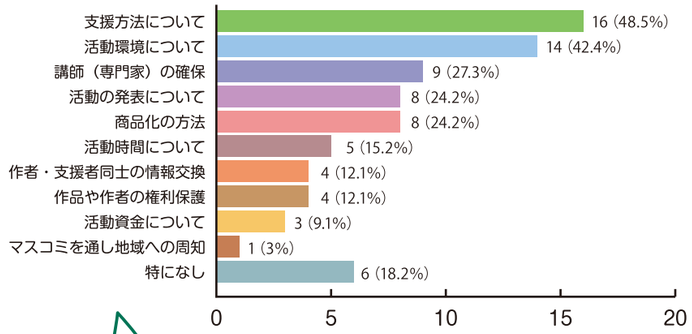
(複数回答可　31件の回答)



「作品鑑賞」のニーズが高い。

質問7 芸術文化活動において、現在の課題や必要としていることがあれば教えてください。

(複数回答可　33件の回答)



発表や活躍の機会をつくる意識・関心の高さが見られる一方で、人的・物的環境に関する課題解決が求められている。人材不足への対策は特に検討が必要。

ら・ら・らレポート

今回のアンケートを通して、障がいのある方の芸術文化活動に高い関心が寄せられていることがわかりました。その一方で、関心がある団体でも、人材不足や情報不足が壁となり、活動の実現が難しい実態も見えてきました。また、活動を実施している団体では、美術に関する専門的人材が不足していました。さらに、課題として「講師(専門家)の確保」を挙げた回答は 27.3% でした。これらの点からも、人材育成を目的とする研修や展示実践などのアウトリーチ事業をはじめ、さらなるネットワークの構築支援が必要であることがわかります。
芸術文化活動として「作品鑑賞」へのニーズが多いことから、県内芸術文化施設におけるアクセシビリティ向上へ向けた働きかけや、対話型鑑賞などにも力を入れていきたいと思います。

人材
ネットワーク
情報・発信

分野を超えて さらに先へ ［協働事業］

ら・ら・らでは、山形県内の芸術文化やデザインを専門とする機関と連携し、協働事業を行いました。異分野同士が互いの専門性を活かしながら、どのように対話を深め、共通する目的をもって協力関係を構築できるか。その新しい可能性を見出すための、企画運営やコーディネートも行っています。

こうふくで

工業×福祉×デザインが連携して、“はたらく”と“いきる”をそれぞれの視点で共有することにより、ここ山形で、みんなが幸せでいられることをデザインするプロジェクト。ものづくりを通してその実現を目指していく取り組みです。

山形県産業労働部工業戦略技術振興課（現：産業技術イノベーション課）／山形県工業技術センターとの協働事業である「工業・福祉・デザイン連携プロジェクト-こうふくで山形-」が本格始動しました。ものづくり企業、福祉事業所、デザイナーの連携による、商品開発の補助事業において、分野を超えた連携のためのコーディネートを行いました。連携における課題も確認しつつ、関係者同士の対話を重ねながら、協働方法を模索中です。
また、オンラインでミーティングを２回実施し、県内外の取り組みを共有したりディスカッションを行い、分野を超えた情報交換やネットワークづくりの機会をつくりました。ただ都市部の価値観に寄せるのではなく、山形らしい幸せのあり方を考えて提案する取り組みとしての発信に、可能性を感じています。

こうふくでミーティング Vol.1

開催日 ： 2021年8月25日（水）
参加者 ： 41名
工業、福祉、デザイン分野がお互いのことを知る目的で、各施設を訪問した動画を共有。

こうふくでミーティング Vol.2

開催日 ： 2022年3月17日（木）
参加者 ： 30名
助成事業採択2団体２事例と、その他の山形県内の工業、福祉、デザインの連携で生まれている4事例を紹介し対話を行う。

相談
人材
ネットワーク
発表
情報・発信

福祉と芸術文化のかけ橋

［ぎゃらりーら・ら・ら］

社会福祉法人愛泉会では、2011年に障がいのある方の作品を展示する場「ぎゃらりーら・ら・ら」を開設し、障がいのある方の芸術活動の発信と人材交流の場として、福祉と芸術文化のかけ橋になるよう、ギャラリーを地域に開いていく活動を行っています。
企画展や、トークイベント、ワークショップ、オープンアトリエなども年間通して開催しています。また、各種相談はこちらからも受け付けています。

GALLERY LA♪LA♪LA

ぎゃらりーら・ら・ら／
やまがたアートサポートセンターら・ら・ら

〒990-0033　山形県山形市諏訪町一丁目2番7号
tel.023-674-8628

ホームページアドレス／ https://www.y-aisenkai.com/info/lalala/
YouTube公式チャンネル／ https://www.

オープンアトリエ「アトリエ ら・ら・ら」

福祉事業所の活動以外で、継続して表現を深めてみたい人や、個人的に表現活動を行っている人が集い、創作する場として月に１回、最終土曜に開催しています。
絵を描いたり、立体物をつくったり、色を染めたりなど、普段使ったことがない画材や手法などを体験しながら、それぞれに合った表現方法に出会う機会をつくり、表現の可能性を伸ばす支援をしています。また、それぞれの作品を鑑賞して感想を述べあう対話も行っています。

小学生から60代まで年齢も特性も様ざまですが、
表現することを軸に出会い、障がいの有無や立場等の枠を超えて、
敬意が生まれ、自然に交流する場になっています。

発表

2021年度 ぎゃらりーら・ら・ら企画展

［企画展］「わくわく・ひょうげんの泉」

社会福祉法人愛泉会の表現活動の中で創作された作品を集めて紹介する展覧会です。
展示作業は福祉事業所のメンバーとスタッフも一緒に行いました。

［第一部］オープニング企画展 「うずまくひかり・さんさんさん」

会　期 ： 2021年5月17日（月）－6月30日（水）　来場者数：230名　出展者数：41名

［第二部］愛泉会作品展 「わくわく・ひょうげんの泉」

会　期 ： 2021年7月12日（月）－8月31日（火）　来場者数：136名　出展者数：79名

［企画展］「みえるものの向こう側」大泉真帆 長谷部康寛 二人展

写真家の長谷部康寛さんが、「やまがた障がい者芸術作品公募展 2020」大賞を受賞した大泉真帆さんの絵画作品に感銘を受けたことから二人の交流は始まりました。2021年1月には、米沢市で開催された「わたしとあなたの作品展」にて共同作品を発表。その後も交換日記をコンセプトにした共同作品を制作するなど、交流を続けてきました。視覚的な身近な世界をイメージへと変換していく長谷部さんの写真作品と、生まれつき全盲の大泉さんが描く点と線、色の重なりにリズムを感じるドローイング作品。視覚的な写真から非現実へと向かう表現と、視覚に頼らずうちなる視覚で訴えかけていく表現。作品を見る人たちがさまざまな感覚を使って「みえるものの向こう側」を感じる展示となりました。

会　期 ： 2021年9月27日（月）－11月21日（日）
企　画 ： 長谷部 康寛、
　　やまがたアートサポートセンターら・ら・ら
出展作家 ： 大泉 真帆、長谷部 康寛(写真家)
来場者数 ： 176名

今回、大泉真帆さんと 2 人展をした事によって作家としてのフラットな関係性を今まで以上につくれたし、沢山の方に真帆さんの魅力や視覚について考え、感じてもらえたと思っています。

真帆さんの作品と向き合い、共同制作をしたことで、自分の個性を発見する事、それを伸ばしていく事の重要性や、それに伴う喜びを痛感する機会となりました。
そこには障害の有無はなく、心地良い関係性を築ける事に繋がりました。

長谷部 康寛（写真家）

［公募展］「第5回 やまがた障がい児者アート公募展 ART DIGる～べ」

山形県知的障害児者生活サポート協会主催で毎年開催されており、今年度で５回目になる公募展。

会　期 ： 2022年1月5日（水）－2月27日（日）
来場者数 ： 288名
応募総数 ： 110名　出展者数： 35名

［外部会場での展覧会］「きざしとまなざし特別展 遊学館」

「きざしとまなざし 2021」の特別展示を山形県立図書館にて開催。

会　期 ： 2022年1月5日（水）－2月27日（日）
会　場 ： 山形県生涯学習センター 遊学館（山形県立図書館併設）

［企画展］「宮城山形交流事業 みやぎ・やまがたニューカマー展」

県知事連盟事業で４回目の交流展。
宮城県支援センターと連携し、注目の作家を紹介。

会　期 ： 2022年3月22日（火）－4月28日（木）
来場者数 ： 41名（3月31日 現在）　出展者数：7名

［企画展］長濱 哲哉 個展「じゃじゃーん!!!! てっちんの世界」

10歳の頃、お絵かきボードに「チョコアイスが食べたい」と描いて自分の気持ちが通じたことからよく絵を描くようになった長濱哲哉さん。中学生の頃からは自分の願望を描くようになり、最近では絵を描くことが自分の気持ちを伝えるコミュニケーションツールの一つになっているそうです。そんな哲哉さんがこれまでに毎日描いてきた絵の展示と合わせて、姉の志穂さんの言葉や写真も展示。さらに母親の奈穂子さんが来場者に対して制作の背景や作品から生まれた人のつながりについても直に話して伝えるなど、哲哉さんの作品を通じて家族の関係性が浮かび上がる、和やかな展示となりました。

会　期 ： 2021年11月29日（月）－12月24日（金）
来場者数 ： 504名

［哲哉さんのお母さん・奈穂子さんからのコメント］

展示において工夫したこと

個展の準備をするにあたって、家にためてあった作品を提出したのですが、そもそもこれだけ手元にあったのも、哲哉が中学1年生の時の絵を見て ら・ら・らのスタッフさんが「とても魅力的だ～！」と声をかけてくださったことから絵を保管してきていたんです。それが今回の個展という奇跡に繋がって、感謝の気持ちでいっぱいです。
展示では、「初めまして」の方々にもいつもの哲哉の明るさ、独特な絵の表現を深く知ってもらえたらいいなと、展示や説明の工夫をしました。初期の作品から並べて頂いたり、家での様子がわかるようにお気に入りスポットを再現したり、絵を通して社会とのやりとりのコーナーになればいいなと。哲哉の絵はパッと見てわかりやすいほうですが、「実は…」と裏話をすることで、「そんなことを感じたり考えたりしているんだ～」と笑ってもらえたり、帰る頃には哲哉という存在を身近に感じてもらえるような、そんな手助けになればと、なるべく個展会場に顔を出していました。「1回観に来たんだけど、説明つきで絵を観るともっとおもしろいね～」と声をかけてもらったことは、本当に嬉しかったです。また、展示会場に設けた感想コーナーも、最初はノートを置くことだけで考えていましたが、付箋に書いて貼り付けてもらうかたちにしたことで、哲哉だけでなく、観に来てくれた方々も興味を持って読んだり書いたりしてくれて、付箋の花が咲いた様で、これもひとつのアートに見えました。

展示期間中の驚かされた出来事

個展と聞いてもピンときていない哲哉でしたが、どうやら自分の絵が飾られてみんなに観てもらえることは嬉しいようで、展示期間中は学校が終わるとほぼ毎日ら・ら・らに立ち寄り、大きな声で挨拶し、入り口のガラスにも絵を描き足して、来場者の感想を見たり。その姿には責任感すら感じられました。
土日は、ほぼ1日ライブペインティングをするということもやってくれました。当初は短時間しかムリなのではと思っていましたが、たくさんの方々に囲まれても大きな声を出さず、イヤホンを使用したりしながら、もくもくと描き、来場された方々の見送りまで !! こんなに社会性があったのか !? と驚かされた次第でした。また、車椅子のお友達が来た時も、自ら迎えに行き、絵を描いている場所へ。話しかけたり、車椅子を押して作品を見せて回ったり。その自然でスムーズな対応に、「いつの間にこんなに思いやりのある子に～！」と、とても感動しました。親の私が「きっとムリ」「これは出来ないだろう」と決めつけていたことを、恥ずかしいとすら思った出来事でした。

「最終日だよ」と伝えると…

小さい頃には、いろいろな場面で白い目で見られ、親子で辛い体験もしました。そんな哲哉が家族連れの前で好きな絵を描き、小さい子の目はキラキラ！　大人の方々も「すごいね～」と興味津々で見ている…。その空間がほわ～んと笑顔に包まれてとても不思議な個展でしたし、こうしたあたたかいまなざしが哲哉にとってプラスに繋がるものだと実感した1カ月となりました。
「最終日だよ」と哲哉に知らせた時も、本人はピンと来ていなかったようなのですが、次の日に、「最終回なの？」と大好きな大河ドラマに例えて個展が終わったことを理解したらしかったのが、彼らしいなと思いました。マイペースな哲哉は相変わらず学校の休み時間に好きな絵を描き、私に何かを伝えてきます。これからもいろんなことに関心を持って描いていくのかな？

［哲哉さんのお姉さん・志穂さんからのコメント］

今回、展示を通して今までを振り返るいい機会になりましたし、個展には私の友人、職場の方々も来てくれたりして、改めて私は恵まれてるんだなあと感謝の気持ちでいっぱいでした。こんな姉弟もいるんだよと、まずは知ってもらい、それがきっかけで自閉症やその他の障がいにも今までと違った見方をしていただけたら嬉しいです。
個展だけでなく、新聞、テレビ、雑誌といろんな形で取り上げてくださり、「すごいね～」「楽しかったよ～」などと声をかけてもらい、なんだか誇らしげな哲哉を見られて私も嬉しかったです。でも哲哉は個展後も本当にマイペースで、今までと変わらずの距離感で「志穂ちゃんおかえりー」と出迎えてくれます。
もし哲哉がいなかったら、今の私より視野が広い考え方は出来なかったと思います。小さい頃から哲哉とのやりとりで相手の立場になって考えようとする力は本当に私の強みになりました。保育士になり、親から離れて初めての集団生活をする子ども達と接していく中でも、とても役に立っています。子ども達一人ひとりと向き合ってどんな関わり方をすれば成長につながるか、余裕を持って見守ることの大切さも、哲哉を通して勉強になったことの一つです。これからもその気持ちを忘れずに向き合っていきたいです。

御礼とあとがき

前年度に続き継続して、福祉と芸術分野の人材が協働できる仕組みづくりや、異分野同士が互いを理解し合いながら実践を進められるようサポートし、県内のネットワーク化と連携強化を図るよう活動を進めてきました。出展者、参加者、関係者のみなさんと試行錯誤した一年、本当にありがとうございました。みなさまのお陰で、公募展や県内各地の展覧会をきっかけに温かいプラットフォームができ始めていると思います。2021年度からは、展覧会だけではない表現の発信（身体表現や作品の二次使用等）にアプローチしていく実践も行いました。感染症対策に気を付けながらの企画で、圏域をまたいでの活動が難しかったのですが、身体表現の事業で関わっていただいた砂連尾理さんの言葉に発想を変えるきっかけをもらいました。砂連尾さんがダンスワークショップを行う高齢者施設では、コロナ禍で対面ではなくオンラインでの実施になり、一緒に空間に入れないデメリットはあるのですが、その分、施設の職員が積極的に動いてくれるようになったというメリットがあることを教えてくれました。たくさんの利用者さんと一緒に活動するときには、支援する職員と連携して同じ空間を作ることがとても大切になります。そこで、山形の企画では、県外から参加の砂連尾 理さんにはオンラインでファシリテートしてもらい、現地の人材が福祉の現場に出向いて対面でワークショップをすることで、現地の人材の育成に繋げる事業にしました。できないことだけに目を向けて嘆くのではなく、目的さえしっかりもっていれば、困難な現状の中から全部ひっくるめて、可能性を見つけていくことができるのかもしれないと思いました。そう考えていくと、いろいろなことの可能性が拡がります。課題に対して努力して克服するだけではなく、その状況を受け入れ活かしながら解決することができるかもしれないと、今回の取り組みで強く感じました。

武田 和恵（やまがたアートサポートセンター ら・ら・ら コーディネーター）